

鵜沼

久 久 比 奴 末

はまゆうと桜貝と

海光るわが故里

第 1 2 0 号

葛巻義敏とその時代	
― 芥川龍之介の知られざる一面 ―	神谷 祐太 … 1
〈チョット見てみよう〉二枚の不思議な鉄板	有田 裕一 …17
鵜沼最後の茅葺家屋が消滅！	
旅館東屋の遺構―江守邸茶室	岡田 哲明 …22
Coffee Break	…30
境川河口の「目印」の松	大川 久 ……32
人と人とのつながりは不思議	竹内 広弥 …34
源 希義 追想記	内田進之助 …36
今井達夫遺品最終整理	… 42
『鵜沼雑記』(四)	古志 秋彦 …45
鵜沼を巡る千一話より	
鵜沼館・対江館鵜沼・貸別荘風の東屋	渡部 瞭 ……49
活動の記録(令和2年1月～11月)	…55
編集後記	…58

『新編相模国風土記稿』(天保12年、1841)に、「鵜沼村久久比奴末半良」とあり、当時は“くぐいぬま”と呼んでいたことが分かる

鵜沼を語る会 発行

葛巻義敏とその時代

——芥川龍之介の知られざる一面——

神谷 祐太（会員）

構成

1. はじめに
2. 葛巻義敏と芥川龍之介
3. 芥川死後の葛巻義敏
4. 晩年の葛巻と葛巻資料
5. おわりに

1. はじめに

本稿では芥川龍之介とその甥である葛巻義敏との交流を明らかにすることを目的とする。彼は『芥川龍之介全集』の編集者であり文芸評論家である。

その研究の意義について述べる前に、筆者がなぜ葛巻義敏という人物にたどり着いたかについて説明せねばならない。筆者は芥川龍之介の記した『支那遊記』を分析することにより、大正期の日本人が抱いた中国人観を明らかにしようと試みている。その資料収集の際に、神奈川県藤沢市文書館に所蔵されている「葛巻文庫」に行き着く。このコレクションの中には、芥川が中国旅行中あるいは帰国後にまとめた手帳が含まれており、これらのメモ書きと新聞連載時の本文の比較検討を行うことにより、連載当時の本文を追うだけでは知ることのできない芥川の中国旅行の実像に迫れるのではないかと考えた。

しかしながら、手帳の解析を進めるうちに、これらの資料を保管していた人物、即ち葛巻義敏に対する興味関心を筆者は抱き始めた。葛巻の足跡を調べていくうちに、彼が晩年の芥川と深いかかわりを持ち、若い頃には武者小路実篤を師として仰ぎ、さらには当時芥川を慕って訪れた作家、画家、思想家と接触していたことを知る。加えて、芥川自殺後の葛巻は堀辰雄や坂口安吾などの著名な作家とも親しくしていたことも興味深い。

現在、芥川研究に欠かすことの出来ない多くの原稿や資料を葛巻が保管していた点に着目したい。さらに保管のみならず、彼自身も『芥川龍之介全集』や『芥

川龍之介未定稿集』などの編集に関与していたことは、その後の芥川研究に計り知れない影響を及ぼした。しかしながら、管見の限り、葛巻義敏について著された書物や論文は見当たらない。

そこで、葛巻本人が残した文書と併せて、彼と芥川や堀、坂口ら親交のあった人物との手紙のやり取りや、彼を良く知る身近な人物が残したいくつかの証言を照らし合わせるにより、葛巻義敏と言う人物像を浮かび上がらせたい。そのため、従来顧みられることのなかった葛巻義敏の足跡や著作について本稿では取り扱う。葛巻義敏の活動を改めて検証することにより、大正から昭和にかけての文壇や、最晩年の芥川をより深く知る事が出来ると考えるからである。

2. 葛巻義敏と芥川龍之介

それではまず芥川龍之介が亡くなるまでの葛巻義敏の経歴についてみてゆくことにしよう。彼の経歴を今に伝える資料には、短いながらもまとまったものとしては、1954年10月発売の『明治大正文學研究』（季刊第十四號「芥川龍之介研究」）における吉田精一との対談「芥川龍之介を語る」¹、および1967年に旺文社より刊行された芥川龍之介の短編集『舞踏会』の解説の中に収められている、葛巻本人が著した「叔父・芥川龍之介のこと」²、並びに妹の葛巻左登子が晩年の1992年に記した「兄のことに就いて—付・芥川龍之介の終焉のこと—」³の三点がある。加えて、断片的に葛巻自身と芥川との関係性を物語る資料としては、『芥川龍之介全集』（1935）に収録されている書簡⁴と、葛巻が編集した『芥川龍之介未定稿集』の「はじめに」⁵と全編を通して葛巻が付した「編者註」がある。これらの資料を用いながら、ひとまず、葛巻の青少年時代を炙り出してみよう。

葛巻義敏は芥川龍之介の姉ひさと獣医葛巻義定の長男として、明治42（1909）年8月25日、内藤新宿にて誕生する。この時、叔父の芥川龍之介は17歳である。1歳のころに、両親が離婚したため、葛巻は生まれたばかりの妹左登子ともども、

¹ 『明治大正文學研究』（季刊第14號特集「芥川龍之介研究」）（東京堂、1954年）、51-67頁。

² 葛巻義敏「叔父・芥川龍之介のこと」芥川龍之介『舞踏会』（旺文社、1967年）、228-232頁。

³ 葛巻左登子「兄のことに就いて 付・芥川龍之介の終焉のこと」『藤沢市文書館紀要』第20号（1997年3月）、75-80頁。

⁴ 芥川龍之介『芥川龍之介全集』第20巻「書簡IV」（全24巻、岩波書店、1997年）。葛巻が編集に携わった『芥川龍之介全集』（全10巻、岩波書店、1935年）の第10巻も書簡集に相当するが、本稿では1997年出版にあたらに収録された書簡を使用しているため、この版を典拠とする。以降『全集』と略記する。

⁵ 「はじめに」葛巻義敏編『芥川龍之介未定稿集』（岩波書店、1968年）、3-6頁。

芥川龍之介の実父新原敏三に引き取られた⁶。ここにはひさの兄である新原得二が経営する牧場があるところで、芥川もたびたび訪れており、芥川と葛巻が最初に出会った場所でもある。

1922（大正 11）年、神明小学校を卒業し、東京高等師範学校附属中学校（現筑波大学付属中学校）に入学する。中学一年の夏にクルップ性肺炎⁷を患ったため療養と通学の便を考慮し、田端にある龍之介の養父の芥川道章⁸（1849－1928）宅に住まい、一時期生活をする。しかし二学期の後半からは、田端から芝の新原家に再び戻る。

1923（大正 12）年、「大叔父の不用意な一言」をきっかけに家出をし、銀座にある出版社「北隆館」にて雑用をこなす「小僧」として働く⁹。およそ半年後、彼の消息を追っていた道章によって発見され、彼は連れ戻される。その後は田端の芥川宅や葛巻の母ひさの再婚先である西川家にて暮らす。

しかし、その後も登校拒否騒動を引き起こし、中学校を退学してしまう。その理由について、当時、新進気鋭の作家¹⁰として注目を集め始めていた叔父芥川龍之介に対する反感が少なからずあったことを、後に葛巻は告白している¹¹。葛巻自身は芥川らとは一線を画す「白樺」派の武者小路実篤や志賀直哉らに私淑していたため、叔父の存在を疎ましく感じ、たびたび叔父をはじめ家族や親類に対して反抗的な態度をとった。やはり後にそのことを認め、「今日の私はその無軌道ぶりを否定する」として反省の弁を述べている¹²。

葛巻は 1920 年、小学 5 年の頃から、単独で武者小路実篤主催の勉強会「日曜の集い」に参加したという。このことから、彼は不登校騒動を起こした際にはかねてより「新しき村」運動に共鳴し、入村を強く希望していたこともあり、そこに参加するつもりであったらしい。大叔母ふきから強い反対を受けたものの¹³、

⁶ 芥川龍之介は新原家の長男として 1892 年に生まれたが、生後 7 か月で、母の精神疾患発症を理由に芥川家に預けられた後、1904 年に母フクの兄芥川道章の養子となった。

⁷ 葛巻左登子、76 頁。「クルップ性肺炎」とは、大葉性肺炎のこと。肺葉全体に発生する炎症であり、高熱、呼吸困難など当時は重い症状を呈した。

⁸ 注 6 にも記したが、芥川龍之介の養父であり、龍之介の実母の兄にあたる。

⁹ 葛巻左登子、76 頁。なお、北隆館とは 1891（明治 24）年に創立された出版社で、現在に至る。『牧野日本植物圖鑑』、『原色昆虫大図鑑』などを刊行。

¹⁰ 雑誌『新思潮』に参加したメンバー、主に、芥川龍之介、菊池寛、久米正雄、松岡譲らのことを指す。小説技巧を重視したため、新技巧派とも呼ばれる。

¹¹ 葛巻義敏、1967 年、231 頁。

¹² 同上。

¹³ 葛巻左登子、77 頁。しかしながら、この時期の武者小路実篤の日記や書簡には、葛巻入村の是非をめぐる記録は管見の限り残されていない。

どうしても、入村の夢をあきらめきれなかった葛巻は、大正 12 (1923) 年 8 月末に、実父の葛巻義定から入村の承認印を得るために北海道へ赴く。この話し合いの最中に、関東大震災が起った。9 月 16 日付の北海道滞在中の葛巻にあてた手紙の中で、芥川は「「新しき村」からは何も云って来ず、又武者がでて来てゐるにしろ、この大騒ぎじゃ居どころもわからない。」¹⁴と述べ、武者小路らからの連絡がいまだ芥川家には届いていないことを伝えている。さらにこの手紙では、事態の收拾が進めば「新しき村」から連絡が来るかもしれないが、今はひとまず北海道の実父宅にて待機しているほうがよいと記している。葛巻は交通機関の復旧後、新原、西川両家とも全壊したため、比較的被害の少なかった田端の芥川家に戻った。

こうした複雑な経緯を経て、葛巻にとって、芥川龍之介から勉強の手ほどきを受けながら雑用もこなす生活が始まった。当初、世間から脚光を浴びはじめた叔父芥川に対して反感を抱き、家出をするなど反抗的な行動をとってきた葛巻ではあるが、二人の「共同生活」ともいべき暮らしの中で、感情を変化させていくこととなる。

歳が離れた兄弟のような二人の共同生活は、芥川が自殺するその日まで続く。すなわち、1923 年から 1927 年までのおよそ 5 年間である。その様子について、葛巻本人が回顧録の中で触れている。それによると、朝の 9 時ごろから夕方 6 時近くまで、夏目漱石、森鷗外、正岡子規などの全集を読むことを日課として課せられていたという。葛巻自身、13 歳の子供にそれらの文学作品を読むよう命じることが妥当な教育方針だったのかと言う疑問もあったようだが、この時の人生経験が後に役立ったと述べている¹⁵。

彼が読書や勉学に励んだ部屋は、芥川が原稿を執筆している書斎に隣接していたため、ときには原稿の清書や整理などの作業を手伝うように声がかかることもあった。その時の芥川の状態について、葛巻は「それは最初多少堪えがたいほどにきびしいものであった。」と書き残している¹⁶。しかしながら、厳しく接する中にも、冗談や皮肉交じりの会話を交わし、あだ名をつけてからかう置き手紙も残されており、葛巻が芥川に対して反発をおぼえていた時期とは打って変わって、両者は良好な関係を築いていったようである。ときには適度に甘やかされたとも

¹⁴ 『全集』第 20 巻、1997 年、27-28 頁。

¹⁵ 葛巻義敏、1967 年、231 頁。

¹⁶ 葛巻義敏、1967 年、229 頁。

述べ、芥川には年少者を教育する資質を持ち合わせていた、と葛巻は評価している¹⁷。小説家として本格的に活動を始める以前は、横須賀海軍学校にて英語の教師を務めていた芥川の経歴を考慮すれば、彼には小説家としての才能は改めて言うに及ばず、若い学生に対して、ときに厳しくときに優しく接する、良き教育者としての一面があったことは、むしろ当然のことであったのかもしれない。

葛巻が芥川宅二階で龍之介と一緒に過ごすようになって2年目の秋、龍之介は彼の為に文芸回覧誌まで作っている。これは、芥川の書き損じた原稿の裏面に葛巻が散文を書くようになったことがきっかけであったようである¹⁸。「丹波熊太郎」というペンネームまでつけて、芥川は「桂義輔に献ず」として、「おれの詩」、「Melancholia」、「ひとりあるもののうたへる」の三篇の詩に散文「商賈聖母」¹⁹と、非常に短い五幕の戯曲「皇帝と皇子」²⁰を加えて体裁を整えたばかりか、『一束之花』と題してわざわざ表紙まで付けた。装幀まで施すほどの凝りようだったのである。この逸話からも、芥川が教育もし、雑用も言いつけながら、他方で共に同人誌の作成を楽しむなど、いかに甥の葛巻をかわいがり、かつ葛巻の文学に対する才能も見出して期待をしていたかが分かるだろう。

彼らは単なる叔父と甥の関係、あるいは保護者と被保護者、教師と生徒という間柄を越えて、ときにおどけ合うなど、ひじょうに打ち解けあった年齢差のある友人関係ともいえるべき関係を構築し、「必要以上の冗談口もきき合ったり、遠慮ない態度で接しあったりした。」²¹のである。彼らのくだけ口調で互いを呼び合う光景は、芥川の手簡集の中にもみられる。以下に、そのいくつかを紹介しよう。

この中にお金十円あり　これにてルナアルの「葡萄園の何とか」と原稿用紙十とちとを買い、餘りたるお金にて足りない畫の具を買うべし　筆も入れれば買てもよし。

エライ叔父　〔1924年9月〕二十三日朝　バカ甥さま²²

¹⁷ 同上。

¹⁸ 同上。

¹⁹ 葛巻、1967年、229頁。

²⁰ 葛巻義敏「芥川龍之介資料『一束の花』」『図書』第51号（岩波書店、1953年）、16頁。

²¹ 葛巻義敏、1967年、229頁。

²² 『全集』第22巻、1997年、88頁。

これは原稿用紙と本を買う用を命じ、余った費用で葛巻が必要なものを買うことを許す旨が記された置手紙である。末尾に注目してほしい。自らを「エライ叔父」と名乗り、葛巻を「バカ甥さま」と呼ぶなど、これを書いた芥川が笑顔が想像できる。愉快的二人のやり取りを示す置手紙を含む往復書簡は 19 通あり、その中には「よっちゃん大王閣下」などのあて名で送ったものがある。

上記の引用では、芥川は原稿用紙を買ってくるように頼んでいるが、葛巻はこのような買い出しなどの雑用を多くこなしたようである。後年、葛巻は原稿用紙について「なお、彼は生涯、殆ど、この本郷の東大前にあった松屋文房具店²³製の、紺色罫の原稿用紙を使っていた。」と述懐している²⁴。これらの原稿の中には、芥川の代わりに購入したものが含まれていることは言うまでもないが、編集者以外に芥川の前稿用紙へのこだわりを今に伝えられるのは、葛巻が身近にいたからこそと言える。

引用中の「足りない畫の具」云々とあるのは、当時、葛巻が熱中していた繪画の道具を指す。彼が繪画に興味を示していたことを示す資料は他の書簡にもみられ、芥川が「レムブランのエッチング」²⁵ や「スケッチ箱」²⁶ を葛巻に買い与えたことが記されている。このことから、芥川が若い葛巻の美術に対する情熱にも理解を示し、彼の可能性を伸ばそうとしていたことがみてとれる。確かに葛巻には繪の才能があったようだ。前出の妹左登子によると、小学六年生の時に制作した版画が、日比谷にある松本楼に飾られたという²⁷。

次に紹介するのは、芥川が保養先の軽井沢から、田端で暮らす葛巻へ宛てた手紙である。

軽井沢は涼しくて、ハイカラで、うまいものが沢山あつて、天国のやうなり。
小穴、佐々木夫妻が来てゐる上、堀もゐる故、一層賑やかなり。どうだ、羨ましからう。この画はがきの氷庫は僕の好きな建物故、ちょつとおがませる。
感涙にむせぶこと随意なり。

〔1925 年 8 月〕卅日 龍之介²⁸

²³ 1884（明治 17）年に創業。夏目漱石、徳田秋声らの愛顧を得る。1955（昭和 30）年廃業。

²⁴ 葛巻義敏編『芥川龍之介未定稿集』、53 頁。

²⁵ 『全集』第 20 卷、1997 年、82 頁。

²⁶ 『全集』第 20 卷、1997 年、41 頁。

²⁷ 葛巻左登子、80 頁。

²⁸ 『全集』第 20 卷、1997 年、174 頁。

芥川は、田端の自宅で留守番をしている葛巻に、快適な保養地での暮らしぶりを伝えて、甥を悔しがらせんとする、まるで子供のようなユーモアあふれる手紙を送っている。ここで登場する「小穴」「佐々木」「堀」というのは、それぞれ、画家の小穴隆一、小説家の佐佐木茂索、堀辰雄を指す。この三名は、芥川の自殺後に、まだ17歳であった葛巻の後見人となり、彼の成長を見守りながら、『芥川龍之介全集』の編集や芥川に関する資料編纂に共に携わった人物でもある。小穴は芥川の存命中、葛巻に絵の手ほどきもし、彼をモデルにデッサンもしている²⁹。小穴と堀に関しては次節で詳述する。

親密度を増していったように思える二人の生活は、芥川が自殺を遂げるその日まで続く。1925（大正14）年頃、芥川は葛巻を連れて家出しかけたことも数回あった。その理由に左登子は家庭内の複雑さを挙げ、心情的には階下の家族とどんどん離れていったと述べている³⁰。同じ頃、葛巻は「アテネ・フランセ」でフランス留学資格の「ブルベ」の特典を得て、芥川を喜ばせてもいたという³¹。1927（昭和2）年7月23日の晩、芥川は、最後の作品となった『続西方の人』の執筆を終え、書斎の奥にある葛巻の寝起きする部屋へ顔を出し、「原稿にノンブルを打つので、お前のB2（ママ）を貸してくれないか」と声を掛けた。絵画に熱中していた葛巻の部屋にはデッサンを描くために用いる2Bの鉛筆があるため、これを借りるためにやって来たのである。葛巻と多少の雑談を交わし、芥川は原稿を完成させるために自室へ戻り、翌朝、息を引き取った姿で同居していた叔母ふきによって発見されるのである。

葛巻は晩年の芥川にとって最も身近におり、親子や兄弟にも似た、あるいはそれ以上の親密な間柄であった。それは次節で紹介する芥川の遺書からも明かされる。葛巻は芥川の彼に寄せた愛情を終生心の誇りとするようになるのだが、それが却って周囲との軋轢を生む要因ともなっていく。

3. 芥川死後の葛巻義敏

『芥川龍之介全集』第23巻には全5通の遺書³²が収録されている。しかし、妻

²⁹ 芥川龍之介「晩春売文日記」（1927年）88頁、『全集』第15巻、1997年。

³⁰ 葛巻左登子、77頁。

³¹ 同、80頁。

³² 『全集』第23巻、1998年、84-87頁。全集では編者により（一）から（五）まで番号が付けられている。（一）は小穴隆一宛、（二）子供たち、（三）（四）は妻文宛となっている。なお、これらはいずれも松屋製の原稿用紙が使用された。

の文へ宛てた遺書は全集に収録されているものとは別に非公開のものが存在する。その内容について、葛巻左登子が回顧録の中で触れている。

文子ハ義敏ノ生活ヲ三年以上保証スル義務ヲ有ス。何ントナレバ、余ハ葛巻義敏ヲ最モ愛スレバナリ。³³

公表されていない遺書の中には以上の項目があった。つまり、芥川は自身の死後も、最も愛すればこそ、甥の葛巻が生活に困らないようにと、書き残していたのである。この遺言は妻文によって忠実に守られることになる。

芥川の死後、葛巻が遺稿の管理や出版社との折衝など著作物に関する一切の権限を有した。17歳の葛巻にこのような大役が与えられた理由として、原稿の清書などの作業に携わっていた葛巻が最も適役であると周囲が判断したことが考えられるが、それまで芥川家の財産を管理してきた養父の芥川道章が龍之介の死から1年後の1928年に他界したことも大きいのだろう。また幼い3人の子供を育てねばならなかった文や老齢の大叔母ふきに、出版関連の仕事をこなせるはずもなく、それらの仕事は自然と葛巻に一任されるようになったと思われる。葛巻は、芥川自殺直後から始まった岩波書店の『芥川龍之介全集』の編集に、佐佐木茂索、小島政二郎、堀辰雄とともに参加し、初巻は同年11月に刊行されている。

芥川死後の葛巻の動向を伝える資料には、画家小穴隆一と、葛巻の異父妹であり後に龍之介の長男比呂志の妻となった随筆家芥川瑠璃子(1916-2007)の随筆がある。加えて、坂口安吾(1906-1955)の随筆や、堀辰雄(1904-1953)の書簡等からも葛巻の様子を窺い知ることが出来る。

芥川瑠璃子の『影燈籠—芥川家の人々』(1991)には、芥川の自殺後、残された家族や親類が如何にして過ごしたかが克明に記載されている。当然、芥川の遺稿を管理する葛巻も登場するのだが、名前ではなく「K」ないし「YK」などイニシャルで語られる。家族以外の人間に対しイニシャルの表記が用いられる場合は、プライバシー尊重がその理由として考えられるが、芥川家で暮らす他の家族や親戚の名は記されるにもかかわらず、葛巻だけが始終イニシャルのみの扱いとなる。また瑠璃子は葛巻のことを「かんしゃく持ち」な性格であったと述べており、芥川本家と葛巻の関係が決して良好ではなかったことを物語っている。

³³ 葛巻左登子、79頁。「文宛ての遺書」の「第三項」と左登子は記している。引用はこの二行のみである。

芥川自殺後の葛巻は、怒鳴り散らすことが多く、家族と口論になった際には「この家で一番えらい」というのが葛巻の常套文句になっていたと瑠璃子は述懐している³⁴。遺稿の管理や出版社との交渉を担っていた葛巻が強い自負心を抱いていたことや、家族との間にたびたび衝突が起きていたことがわかる。

この時期の芥川家における葛巻の様子を知るもう一つの手がかりとなるのが、先にも述べた小穴隆一（1894-1966）の随筆『二つの繪』（1956）である。小穴は芥川の無二の親友であり、芥川作品の装幀³⁵を手掛けたことでも知られる。さらに自殺直後の芥川の顔を描いた人物でもある。小穴が葛巻をモデルに絵を描く様子を、芥川は日記に記している³⁶。妹の左登子も「芥川叔父と暮らしつゝも小穴画伯に洋画を教えて貰ったりし」³⁷たと述べており、葛巻にとってはもう一人の近しい保護者ともいうべき存在だったと言える。芥川は小穴との書簡のやり取りの中で、たびたび「甥の坊主君」を話題にしている。その中で、葛巻に「何かにありつく習慣」がつきはじめていることを芥川は懸念して、小穴の下へ葛巻が訪れた際には一切何もくれてやるなと念を押す一文³⁸まで書き残している。大人の間で暮らす中、葛巻はいつの間にか、与えられる生活に慣れ始めていたことがみてとれる。

しかしながら、芥川の死後しばらくすると、葛巻と小穴の関係に軋轢が生じることとなる。その原因について、小穴は葛巻が生前の芥川の未発表の原稿を含む著作に関する一切の権利を独占し、芥川家に暮らしながらも、芥川本家の人々に対し心を開くこともなく、また独占した版權を譲渡する気配もなかったためだと記している³⁹。芥川瑠璃子が葛巻に対して抱いていた嫌悪感の理由について、彼女は随筆の中で詳しく述べていない。だが、同時期の芥川家について綴っている小穴の随筆から、芥川家における当時の葛巻の立ち位置を知ることが出来る。

小穴は葛巻のことを、「家ダニ」と呼び、強い不快の念をあらわにしている。

芥川が死ぬとたちまち、「芥川龍之介の跡継は自分だ。この家の物はなにからなにまで自分のものだ」（昭和九年に奥さんが僕の家で語る）と芥川家

³⁴ 芥川瑠璃子『影灯籠—芥川家の人々—』（人文書院、1991年）、63頁。

³⁵ 1921（大正10）年の『夜来の花』以降、芥川作品の装幀を小穴が手掛けている。発表者が博論で扱う『支那游記』のデザインも含まれる。

³⁶ 芥川龍之介「晩春売文日記」『全集』第15巻、1968年、87頁。

³⁷ 葛巻左登子、80頁。

³⁸ 『全集』第20巻、1997年。

³⁹ 小穴隆一『二つの繪』（中央公論社、1956年）、227-229頁。

の家ダニになつてゐるのである。⁴⁰

小穴はほかにも、芥川が妻文にあてた遺書の三年間は葛巻の面倒を見よという文言を、葛巻自身は三十年厄介をかけるつもりでいるのではないかなど、強い憎悪を表明している。小穴は生前の芥川とは無論、芥川死後の芥川家と親しい間柄にあったため、おそらく一般には公開されていない芥川の遺書を目にする立場にあったのだろう。さらに、小穴は、「葛巻は共産黨、芥川の死を境に妙な人間となつてしまつてゐる。」⁴¹と述べている。葛巻が共産黨支部に属し活動していると指摘し、もはや小穴の手に負えない人間になってしまったと言わんばかりである。

芥川家や小穴との関係悪化の一方で、葛巻は『全集』の編集に携わりながらも、東京・神田にあるアテネ・フランセへ通い続けていたようである。1929（昭和4）年には、同校でフランス語を学んでいた坂口安吾らと知り合い、仲間とともに、フランス語の詩を和訳したものなどを載せる「同人雑誌」を作成することになる。『言葉』は後に、フランス語の翻訳のみならず、自作の小説を掲載する同人誌『青い馬』となった。坂口は後に当時のことを、『処女作前後の思ひ出』（1946）、『暗い青春』（1947）、『青い絨毯』（1955）という随筆で回顧し、葛巻との交流やその人となりについても詳しく述べている。葛巻の主導のもと、同人誌を岩波書店から出版することにし、二人は交渉にあたつた。同人誌の出版を渋る岩波に対して、『芥川龍之介全集』の出版差し止めを求めることもできると、怒りのあまり脅迫ともとれる発言をして出版の承諾をさせた葛巻の印象を、坂口は以下のように述べている。少し長いが引用する。

彼の全身は怒りのためにふるへてゐた。葛巻は良家の躰よく育てられた礼儀正しい少年で、自分の意志を率直な言葉で表現することのできない弱気な貴公子といふ風で、私は彼の怒つたのを見たことすらこのとき一度あるのみ、ふだんはウンザリするほど煮えきらない人だ。それがあつた種の立場に立つと、先方の事情などは全然思ひやらず、これほど大胆向ふ見ずに自分の利益を主張できるものかと思ひ知つて、呆れもしたが感動もした。私などにはない坊

⁴⁰小穴隆一、240頁。

⁴¹小穴隆一、240頁。

ちゃんの純粹さを見たのである。⁴²

坂口の弁を借りるならば「弱気な貴公子」といった印象の葛巻であるが、芥川龍之介の著作物に関する権利を己が有していることに対する自負心は、小穴の叙述でも触れられていた通り、並々ならぬものがあつたようである。しかしながら、先述した芥川瑠璃子の指摘する葛巻の癩癩持ちで怒りっぽい性格という証言とは合致せず、坂口らアテネ・フランセの仲間の前では、怒りをあらわにすることはない人物として捉えられていたらしく、上記のとおり、坂口も、葛巻が怒る姿を見たこの一回きりだと回想している。

さらに葛巻の性格に関して、坂口は「一見優柔不断な葛巻は、然し、最大の執拗さを以て、あれこれと廻りくどい表現で自説を固執してやまない。私はどうしても負けてしまふ。」⁴³とも述べている。葛巻が芥川家の人々や小穴と、陰悪な関係に至った背景にも、勿論、印税の分配をめぐるトラブル⁴⁴が第一にあつたのだろうが、坂口が閉口するほどの「執拗さ」も一因であつたと思われる。

葛巻が芥川家の人々とよく衝突していたように、坂口とも程度の差こそあれよく口論を繰り広げていようだ。その時の様子は、よほど坂口の印象に残つたとみえ、以下のように証言している。

葛巻がすねはじめると、僕は怒気満々、食ってかかる勢いで口論になるのであつたが、葛巻は女性のように柔和な病弱にも拘かかわらず、自説の執着に至っては話の外で、おだやかな言い方と、弱々しい微笑と、持もって廻まわつた表現で、最後の最後まで食いさがる。結局僕の根負けであつた。⁴⁵

ここでも、葛巻との論争に至ると坂口は結局引き下がってしまったことを告白し、葛巻は自己の主張にひどく固執する性質で、決して自説を曲げない性格の男であつたことが伺える。前述した瑠璃子の証言によれば、葛巻は怒りっぽい性格であり、自分が一番芥川家で偉いという傲慢な態度を通していたことを指摘されていたのであつた。これにに対して、坂口の前で普段は柔和さで優柔不断さを示し、穏やかな口調で話すなど、葛巻が「女性のように」な面を見せていた点は興

⁴² 坂口安吾「処女作前後の思ひ出」『坂口安吾全集』第4巻（筑摩書房、1991年）、47頁。

⁴³ 同、48頁。

⁴⁴ 小穴隆一、240頁。

⁴⁵ 坂口安吾「青い絨毯」『坂口安吾全集』第15巻（筑摩書房、1991年）、268-269頁。

味深い。芥川家や小穴の前で見せていなかった彼の一面だろう。

坂口が書き残した葛巻に関する言及は、田端の芥川宅に訪れた際の思い出が大半を占めている。坂口は葛巻とともに、前述したフランス語の翻訳や執筆活動を、芥川宅の二階で行っていた。この時、彼らが翻訳したのは、ジャン・コクトーのエリック・サティ論であり、それに詳細な補注を付した⁴⁶が、それは『言葉』ではなく、『青い馬』創刊号（1931）に掲載された。繰り返すが、同人誌のための翻訳や創作活動に使われたのが、生前芥川が執筆をしていた書斎と、そこに隣接する葛巻の勉強部屋であった。芥川の死後は、そこに坂口が足繁く通い、数年ほど作業部屋として使用していたのである⁴⁷。

このときの葛巻の執筆に対する姿勢について、坂口は以下のように、振り返っている。

葛巻は、私の横で小説を書いてゐる。これが又、私の翻訳どころの早さではない。遅筆の叔父とはあべこべ、水車の如く、一夜のうちに百枚以上の小説を書いてしまふ。この速力は私の知る限りでは空前絶後で、尤も彼は一つも発表しなかつた。⁴⁸

葛巻の執筆の速さに感嘆している坂口のコメントだが、葛巻が書いたものを破棄してしまい一切発表しなかったことについても触れている。葛巻がここまで同人誌の作成に打ち込んだ動機として、坂口は葛巻が当時思いをよせていた女性の存在を指摘している。

己れの愛情に就て葛巻は至極率直で、この愛情は一方的な片思いにすぎないのだが、葛巻は万事友人に隠しておらぬ。ただ令嬢に向ってだけ打開けることができないという気の毒なものであった。⁴⁹

葛巻がある令嬢に対して真剣に恋をし、そのことを彼が周りの友人に隠していなかったことについて述べられている。また、葛巻が書いたものを破棄してしま

⁴⁶ 大原祐治「文学と音楽の交錯—出版期における坂口安吾」『人文社会科学研究』第20号（千葉大学、2010年）、7頁。

⁴⁷ 坂口安吾「処女作前後の思ひ出」48-49頁、「暗い青春」201-202頁、216頁、「青い絨毯」266-2頁。

⁴⁸ 坂口安吾「暗い青春」『坂口安吾全集』第5巻（筑摩書房、1968年）、202頁。

⁴⁹ 坂口安吾「青い絨毯」、269頁。

い、後世にその作品が残らなかった遠因に、葛巻の失恋があったことも示唆されている。そのときの様子を、坂口は「葛巻なども多くの人々に最も幸福な人よと
思われていたに相違ない。」⁵⁰とも評しており、恋に焦がれる二十歳の葛巻青年
の様子を「最も幸福な人」と皮肉たっぷりに表現している。しかしながら、そこ
には、親しみや懐かしさが込められており、坂口自身もこれらの著述を書き残し
てから間もなく世を去っている。

坂口が本格的に作家生活に入るきっかけとなった、アテネ・フランセ時代の同
人誌づくりのメンバーの中で、とりわけ中心的な役割を果たしていた葛巻を、二
十年近くたってから書き起こしていることから、坂口が共に青春時代を過ごした
葛巻を懐かしみながらも、坂口自身の作家生活を振り返っていたようにも思える。

4. 晩年の葛巻と葛巻資料

坂口安吾の随筆の中でも特に注目に値するのは、葛巻の健康についての記述で
ある。

葛巻はカリエスだった。胸のレントゲン写真を私に見せ、自分も頬杖をついて
眺めてをり、どう？　ちよつと、いやね、と言ふ。クスリと大人のやうな笑ひ
方をする。そして、君は健康だねえ、と言ふ。⁵¹

上記の引用では、葛巻がカリエスを患い闘病していた様子を伝えている。また、
葛巻が不眠症に悩まされ、鎮静催眠薬カルモチンを過剰に服用している様子につ
いても、坂口は触れている。このときの、心身ともに衰弱した様子について、葛
巻自身も「病弱だったこれまでの生涯」と表している⁵²。そのことを裏付けるも
う一つの資料として、作家堀辰雄が葛巻にあてた手紙⁵³があり、その中で頻りに
葛巻の体調を気遣う言葉が使われているのである。

ちなみに、葛巻は肋膜に菌が入りこむことで発症するカリエスを患っているが、
叔父の芥川も、1921（大正10）年の中国旅行の際に、上海逗留中に、乾性肋膜
炎を発症し3週間ほど入院生活を送っている。また、芥川の実父新原敏三はスペ
イン風邪で亡くなり、芥川龍之介の息子比呂志も肺結核で亡くなっていることな

⁵⁰ 同、275 頁。

⁵¹ 坂口安吾「暗い青春」、207 頁。

⁵² 「はじめに」葛巻義敏編『芥川龍之介未定稿集』1968 年、4 頁。

⁵³ 堀辰雄『堀辰雄全集』第8巻「書簡集」（筑摩書房、1978 年）、115、131、184 頁等。

どから、肺を病みやすい家系であることも推測できる。芥川は体調を崩して以降、睡眠薬や鎮痛剤を過剰に服用する生活を送り、最終的には、薬物の多量摂取によりその生涯を閉じた。奇しくも、甥の葛巻も、芥川の自殺後に、病床に伏し「カルモチンをがぶ飲み」して倒れるように眠る生活をしていた。

こうした葛巻の体調不良や精神の衰えと、上述の芥川家の経済的な事情からか、フランス語の学習を熱心に行っていたにも拘らず、ついにフランス留学を果たさずに断念してしまっている。また創作活動についても「破りすてて結局一作も発表はしなかった」⁵⁴と坂口が述懐している。葛巻の名が現在知られていない原因は、彼が留学の夢を含め、画家や小説家としての道を自らの意志で閉ざしてしまい、作品を後世に残していないという点にある。

坂口らと『青い馬』の出版および執筆稼働を行っていた当時、ともに『芥川龍之介全集』の編纂に携わった堀辰雄の勧めで、堀の主催する同人誌『驢馬』11号（1928）に、葛巻は小説を投稿している。このころのことは、堀の書簡からうかがい知ることが出来る。堀は葛巻の文章を「非常に読者を疲れさせるものを持ってゐるよ。」⁵⁵と葛巻に宛てた手紙の中で評しており、堀は葛巻に対して、忌憚のない意見を言える立場にあったことがわかる。また、全集の編集方針について意見を交わし、互いの病状を気遣う手紙のやりとりをしている。

5. おわりに

1935年に『芥川龍之介全集』全十巻の編集に携わった後の葛巻は、フランス留学の夢を叶えることもなく、また、自らが描いた絵画や小説を発表することはなかった。葛巻がなぜ小説や絵画一切残さなかったか、あるいは、戦後に再び執筆あるいは創作活動に専念しなかったのか、その理由についてなにも述べていない。先に紹介した坂口の指摘の通り、令嬢に対する情熱から小説や同人誌を熱心に制作していたことや、堀の主催する同人誌『驢馬』に一度投稿したきり、小説をそれ以降書かなくなったことなどから、推察するに、彼が期待していたほどの評価を、周囲から得られなかったことが大きかったのかもしれない。もちろん、カリエスの発症など身体的な理由から、留学や創作を断念したことは想像できる。しかしながら、妹の回顧によれば、1925年に、フランス留学の資格である「ソルベ」をすでに得ていたというのだが、「ソルベ」とはフランス語を教える資格

⁵⁴ 坂口安吾「青い絨毯」、268頁。

⁵⁵ 堀辰雄『堀辰雄全集』第8巻（筑摩書房、1978年）、71頁。

のことであり、留学資格を指さない。このことから、葛巻が周囲に対して虚勢を張る性格であったと察せられる。その虚栄心や芥川に最もかわいがられたという強い自負心とが、小穴や瑠璃子にみられる葛巻に対する嫌悪を生む要因となったのだろう。

葛巻が芥川家から疎まれる一因に、芥川の遺稿や手帳などの独占が挙げられる。しかし、そのおかげで、戦火による焼失を免れたこともまた否めない。さらに、葛巻が全集の編集や未定稿集の翻刻を行ったため、現在、多くの未発表の原稿を活字で読むことが出来るのである。このことが、その後の芥川研究に大きく寄与したことは確かである。葛巻には定職に就いた形跡は見られないが、芥川が残した原稿を編纂し、芥川作品や生涯に関する著作を著わすなどして収入を得ていた。それらは、『日本文学アルバム』（筑摩書房、1954年）、『私のノート 椒圖志異』（ひまわり社、1955年）、『近代作家研究アルバム・芥川龍之介』（筑摩書房、1964年）、『芥川龍之介未定稿集』（岩波書店、1968年）、『芥川龍之介未定稿集・デッサン集』（雪華社、1971年）である。

これらの著作に収録された、芥川に関連する資料は、葛巻が「遺稿を詰めた大型トランクと起居を共にして」⁵⁶守ってきたため、戦時下に焼失することを免れ、全集や未定稿集に収められるに至ったのである。しかしながら、1968年に『芥川龍之介未定稿集』が刊行されて間もなく、当時住んでいた家が火災に遭い、資料の一部は焼失してしまう。その上、葛巻は生活費を捻出するために、1969年以降数回にわたって資料の一部を懇意にしていた神田神保町にある古書店三茶書房の店主岩森亀一に、散逸させないことを条件に売却している⁵⁷。それらは現在、山梨県立文学館に収められている。それ以外の資料は1985年の葛巻の亡き後、神奈川県藤沢市鵠沼在住の妹左登子に引き継がれた。その左登子は、1997年、入院を契機に、保管していた資料を藤沢市の文書館に寄贈した。これらの貴重な資料群は「葛巻文庫」と名付けられ現在に至っている。

葛巻義敏は1985（昭和60）年12月16日に76歳で亡くなった。死因は心不全だった。しかしながら、芥川瑠璃子は、葛巻の死について「食物の誤嚥による窒息死」と述べているうえ、没年も昭和61（1986）年とし、いずれも正確ではない。さらに「それまでのKの仕事上のことは一応認めるとしても、私達にして

⁵⁶ 「『椒圖志異』上梓余語」、葛巻義敏編『私のノート 椒圖志異』（ひまわり社、1955年）、頁記載なし。これは出版元であるひまわり社の編集者が葛巻から聞いた話として記されたものである。

⁵⁷ このことについては、岩森が自費出版した『作家と古本屋』に詳しい。

きた行為、人格上の行為に疑問を持っていた」と続けている。そのため、葛巻が芥川家を離れ、1960年代に世田谷で暮らすようになって以降は、1968年の火災騒動の際に一度会ったのみで、それ以降は、全く連絡を取ることもなかったとも述べている⁵⁸。

(かみや ゆうた)

鵜沼とのゆかり

葛巻義敏は芥川龍之介が鵜沼に居住した1926(昭和元)年から1927(昭和2)年にかけて来訪している。1944(昭和19)年5月に芥川 文らと田端より鵜沼海岸3-11-5に疎開し戦後、東京に戻った。その間、鵜沼海岸住民が組織した文化サークル「なぎさクラブ」の文芸班の指導を引き受けた。

1968(昭和43)年4月、自宅の火災により、先に鵜沼海岸3丁目に住んでいた妹の左登子(元鵜沼を語る会会員)の許に身を寄せ、1985(昭和60)年暮れ、鵜沼海岸で急性心不全にて死去した。死後、義敏が管理していた芥川龍之介の遺品は左登子が引き継いだ。鵜沼を語る会の幹旋で藤沢市文書館に寄贈され、「葛巻文庫」として管理されている。鵜沼を語る会刊行の会誌『鵜沼』第69号<1994(平成6)年1月11日発行>に、『叔父・芥川龍之介のこと』と題する手記が再掲されている。

葛巻義敏鵜沼関係年譜

1926 (昭和元)年 12月 29日	芥川龍之介の二階家に来て一緒に泊まる
1927 (昭和2)年 1月 5日	鵜沼から田端へ帰る
1940 (昭和15)年 9月	結婚し、世田谷に新居を構える
1944 (昭和19)年 5月	東京世田谷より疎開、鵜沼に転居
1946 (昭和21)年	鵜沼海岸に「なぎさクラブ」(文化活動の交流会)結成。1948年まで文芸班を指導する
1949 (昭和24)年	鵜沼から世田谷へ帰る
1968 (昭和43)年 4月	世田谷の自宅が火災で焼け出され、鵜沼の妹 =葛巻左登子宅に転居
1985 (昭和60)年 12月 16日	鵜沼海岸の葛巻左登子宅で、急性心不全にて死去

<上記二項 編集者注>

⁵⁸ 芥川瑠璃子、201頁。

チョット見てみよう

二枚の不思議な鉄板

有田 裕一（会員）

鵠沼大東の鉄板

鵠沼小学校の近く、本鵠沼一丁目の13、14、15、16番地の合わさる道路の交差点、高橋精肉店の前の辻に、長いこと穴のあいた厚い鉄板が埋まっていた。四つ辻の真ん中にあったもので、角を曲がる車のタイヤの摩擦で表面はツルツルで、全体に直径数センチ程の穴が無数にあいているのである。



大東の辻にあった頃

最初にこの異様な穴のあき方が何だか解らず、20年位前であったが、この大東集落の長老、関根佐一郎氏（明治41年生まれ）にいろいろ古い話を聞きに訪れた時、この鉄板が何なのか訊いてみた。

関根老は、「かつて辻堂海岸は海軍の射撃場で、兵隊が近くの鵠沼や辻堂の農家に分宿したり食料等世話になる事がよくあった。ある時、横須賀鎮守府の重砲隊が大東の水路を渡り、これにかかる土橋を壊してしまった。その時、土橋の代わりに残っていたのが、この厚い鉄板だよ」と言われたのである。

その後、この水路は埋められ暗渠となったが、道路の舗装の時も市の粋な計らい(?)で、土橋当時の位置に鉄板が残されたものだったのである。

この辻は、かつて西北の皇大神宮方面から流れる小さい水路があり、それは本鵠沼駅西側を流れ、本真寺脇を通っていた。これに交差する道路は北側の一本松踏切、原を経て堀川方面へ続く。徳富蘆花の小説「思い出の記」（1900年3月～1901年3月国民新聞に連載）の主人公が藤沢駅から歩いた道がこの辻を通っていて、彼（蘆花自身）もこの鉄板を渡ったのかも知れない。

今ある場所と説明板

この鉄板は本鵠沼1-16にある第144号緑地（通称：大東町内会公園）の一角に平成28（2016）年3月に移設され、以下の様な説明板が立っている。

大東の辻の穴あき鉄板

明治二十一年（一八八八年）に旧海軍技手の下瀬雅充（しもせまさちか）が、ドイツから持ち帰った新火薬を、大砲を使って辻堂海岸で試射しました。試射には、何枚かの鉄板が標的や砲台に使用されましたが、これはその内の一枚とされています。この鉄板は当時英国で製造された戦艦三笠、タイタニックの鋼板に成分が類似しており、英国製ではないかと言われています。

かつて皇大神宮から柳原、本鵜沼の駅にかけて小さな川が流れていました。ちょうど大東の辻あたりに土橋がかかっていましたが、横須賀鉄砲連隊が、射撃場のある辻堂海岸に鉄砲を運ぶ際に土橋を壊してしまいました。そこで射撃的になっていたこの鉄板を持ってきて、橋の代わりにしたと伝えられています。

この鉄板は川が地下に埋設された水路となった後も長く大東の辻に残されていたものを移転したものです。

平成二十八年三月

大東町内会

これによれば、この鉄板は、当時英国で製造された戦艦三笠や、タイタニック号の鉄板と成分が類似しているから、英国製の鉄板ではないかとされている。

また、なぜ大東の辻にあったかは、関根老のお話と同様である。

鉄板の大きさは、縦 199 cm、横 150 cm 厚さ 3 cm。

穴の直径は 6~7 cm、数は 70 個ほど、である。

砲弾貫通の衝撃からか全体に大きく撓んでいる。

また、ツルツルだった表面はすっかり赤錆が出ている。



砲弾が突き抜けたとされる無数の穴

穴があいている訳

鉄板に穴のあいている理由は、関根老が言われたように辻堂海岸で火薬の威力を試射したもので、その何枚かの内の一枚だそうである。

その火薬とは、下瀬雅充（しもせまさちか）が実用化に成功した下瀬火薬だったそうで、1893（明治26）年に国産に成功、日露戦争1904（明治37）年2月～1905（同38年）9月で始めて使われたという。

ところで、この鉄板の穴はいつ頃あけられたのだろうか。辻堂海岸は、その昔、横須賀鎮守府の砲術試験場となっていたが1906（明治39）年、海軍が土地40町歩を買収し、以後は演習場として固定されたのである。

それに先駆けること18年の1888（明治21）年、下瀬がドイツから持ち帰った新火薬を辻堂で性能を試し、5年後には下瀬火薬として国産されるようになった。

鉄板の穴は、その試射によるものといわれ、実験時期は明治20年代末から30年半ばころまでの間ではないかと思われる。



A 元あったところ と B 現在ある場所

辻堂の鉄板

もうひとつ、辻堂元町3-15にある八森稲荷神社にも同じような鉄板が残っていて、ここにも以下のような説明板が立っている。

鉄板と下瀬火薬

明治二十一年（一八八八年）に旧海軍技手の下瀬雅充（しもせまさちか）が、ドイツから持ち帰った新火薬を、大砲を使って辻堂海岸で試射しました。試射は成功し「下瀬火薬」と命名。後の日露戦争で実戦に使用され、その威力で威名をはせました。

試射には、何枚かの鉄板が標的や砲台に使用されましたが、これはその内の一枚とされています。

この度、鉄板をここに設置するにあたり、専門家に時代考証をお願いし

ましたところ、この鉄板は当時英国で製造された戦艦三笠やタイタニックの鋼板と化学成分が類似していることから、英国で製造されたものであることが分かりました。

平成二十四年四月十七日

藤沢市 西町町内会

この説明板の内容も大東のものと大同小異であるが、こちらは穴があいていない。鉄板の大きさは、縦 165 cm、横 152 cm、厚さ 6 cm。大東の倍の厚さである。

私は未使用と聞いていたが、岡田会員の所見では中央が 1 cm ほど撓んでいるという。

厚さが 6 cm もある鉄板が撓むには相当な応力が掛かったに違いなく、それは火薬自体の爆発力のテストに使用されたのかも知れない。

今は竹の四ツ目垣のなかに石の台の上に設置されているが、それ以前は境内の地上に放置されていた。

15 年程前に辻堂西町町内会館に隣接する旧家、植木さんの老御主人に伺ったところ、「この鉄板は、地図 A の位置に昔、水路がありそこに架かっていたのだ」とのご返事であった。

太平洋戦争時、金属が不足し一般家庭にも供出命令が出たが、こんな大きな鉄材が 2 枚とも供出されずにいたのは不思議といえ不思議である。

皆さんも、この近くを通ったら、ちょっと見てみたらどうでしょう。



A 元あったところ と B 現在ある場所



八森稲荷神社境内の鉄板

さらにもう一枚あった？

大分以前になるが、八部の田んぼの中を、灌漑用水路が敷かれていて大平橋付近にあった堰から取水して今の江ノ電バス車庫の敷地を通り伏見稻荷神社の池へ流れていた。現在の鵜沼新道から、藤沢市老人福祉センター湘南なぎさ荘の前を行った先に四つ角があるが、ここにも水路をまたぐ鉄板があったという話も聞いたことがあるが、それには竜宮橋の近く（渡部暲「鵜沼を巡る千一話」第 320 話）という説もあって、私もいつ誰から聞いたのかも定かでないし、第一、現物が見当たらず今となっては確かめる術がないが、どなたかご存じありませんか。

下瀬雅充と下瀬火薬

下瀬雅充（しもせまさちか 1860～1911）は広島藩士鉄砲役下瀬徳之助の長男として広島で生れ、広島英学校卒業後上京し、工科大学（今の東大）応用化学科を出て内閣印刷局に奉職、版面洗浄液や紙幣の真贋を見分け易い黒色インキを発明した。

1887 年、海軍技師となり赤羽火薬製造所で火薬の研究に従事する。1891 年 1 月から 1 年間ドイツに留学しピクリン酸を原料とする火薬の製造方法を学んだ。

ピクリン酸は 1771 年ドイツで染料として発明されたが、爆発性があることから、約 100 年後に火薬として実用に供されるようになったものである。

下瀬雅充は帰国に当りピクリン酸製造工場の設計図を持ち帰り、国産化、量産化を図った。ピクリン酸は金属と化学結合し易く、変化してしまう欠点があった。

下瀬は、砲弾の内側に漆を塗り、さらにピクリン酸との間にワックスを注入することで金属との化学結合を避ける方法を 1893 年に発明した。

下瀬火薬は日露戦争（1904～1905）のとき、バルチック艦隊との闘いや旅順攻撃の際、陸軍が苦戦する中、海軍の援護砲撃が勝利をもたらしたことで、世界的に有名になった。下瀬火薬は、炸裂力が大きく、砲弾、魚雷、機雷、爆雷に、鋭敏な伊集院信管とともに用いられたのであって、薬莢につめる弾丸の発進火薬としては用いられていないという。

＊

多数の貫通孔のある鉄板は、薬莢火薬の貫通力の実験だったとすると、下瀬火薬ではなさそうである。大東の説明板の記述が本当に正しいのかどうか、すこし疑問も残るのである。

（ありた ひろかず）

鵜沼最後の茅葺家屋が消滅！

旅館東屋の遺構―江守邸茶室

岡田 哲明（会員）

はじめに

鵜沼の開発者伊東将行が明治 30 年頃、旅館東屋を創業し、長谷川たか、ゑい姉妹によって営業を続け、多くの文人墨客に愛される宿となった。

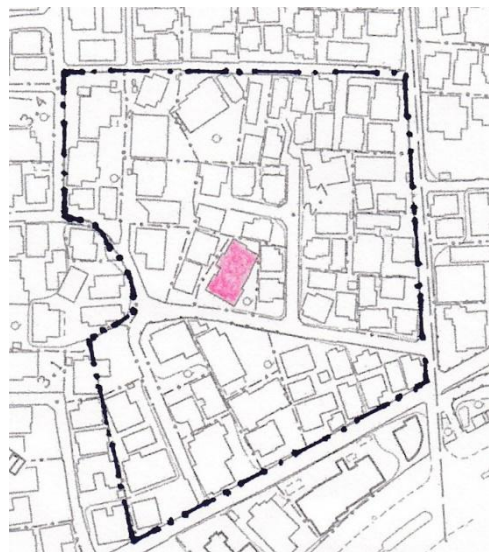
ゑい没後、経営を引き継いだたかは、大正 12 年の関東大震災で地震と津波の被害に遭ったが、東京外語大を出てパリ留学中だった跡取りの長谷川欽一を急遽呼び戻して復旧に取り組み、翌年には営業を再開した。しかし、欽一は実業に不向きで、昭和 13 年にたかが没すると翌年の昭和 14 年に廃業した。

同年 9 月 12 日の東京日日新聞に「鵜沼名物文士宿、突如廃業の声明」という記事が掲載されている。

廃業後、長谷川家は土地の所有権はそのままに敷地の東半分を貸し、そこに松本松之助が何軒かの借家を建てたと聞いていると欽一の令息祐氏はいう。

そのとき、いくつかの離れは、そのまま借家として転用されたのであろう。

24 ページの「戦時下の東屋」の図を見て頂きたい。その借家に転用された離れの建物のうち、ただ一つ残っていたのが江守邸であるが 2020 年 8 月末ついに消滅することとなった。



江守邸の位置・鎖線は旧東屋敷地を示す
(藤沢市発行白地図)



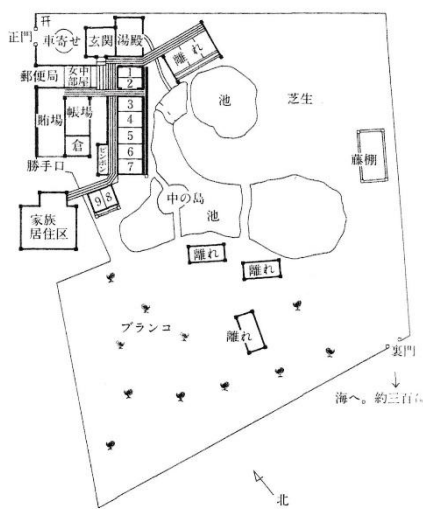
解体重機が入った江守邸 2020/8/25

もとは東屋旅館の離れ

東屋には、創業当時から庭にいくつかの離れがあった。その一つが戦後、江守氏の所有となり茶室に改装されたものなのである。

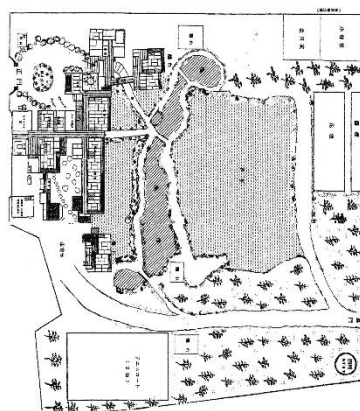
宇野浩二は『芥川龍之介』のなかで「さて、東屋ではこの花（花札のこと）は、いつも大杉の部屋で催された。大杉の部屋は二階の八畳で、誰の部屋よりも広々としていたからである。大杉の座敷からは目の下に東屋の庭が見下ろされた。その庭全体が芝生で、その芝生の真ん中辺に池があって、その池のほとりに亭があった。それで庭全体が箱庭のように見えた。さて、その亭は小さい家になっていた。入口もあり縁もあり全体が四畳半位の部屋になっていた。そうしてその部屋には、いつも二人の男がいて、その二人の男は、障子が開けてあるので、ときどき大杉の座敷を、じろじろと見上げた。それは大杉を尾行する刑事である。

従って、大杉がその二階の座敷にいれば、二人の刑事は安心して、その亭の部屋で休息できるわけであった。それで大杉は、私たちと花かるたをしている時、ときどき目に微笑を浮かべて、その亭の方を見ながら“あそこに番人がいるから安心だよ”といった」と書いている。亭は離れのことで。



震災前の建物配置

鶴沼 69 号（有田・西氏作図）



（敷地形状は概念図）

震災後の建物配置

鶴沼 82 号（長谷川祐氏による）

上図の示すように、震災前も震災後も庭園内に数カ所の離れがあったが、これの用途は、客の宿泊用であって、茶室とか、四阿のようなものではなかった。

大杉とは大杉栄のことで、大正10年9月から11年3月にかけて伊藤野枝と長女の魔子連れて東屋に滞在しているから、宇野が書いているのはその間の事である。大杉が滞在した座敷は母屋の二階の一番東端の部屋であったと高三啓輔氏は『鵜沼・東屋旅館物語』で推察されている。江守邸になった茅葺の離れが、二人の刑事が詰めていたそれであったかどうかはわからない。

大正12年9月1日に起こった関東大震災における鵜沼の被害は倒壊家屋が多数だったが、津波による破損家屋はあったものの流失家屋は僅少だったようだ。

東屋も瓦葺2階建ての主屋などは倒壊したが、屋根の軽い茅葺平屋の離れは、おそらく若干傾いた程度で、元あった位置のまま修繕復旧したと思われる。

宿泊用離れを入手、茶室に改造

戦後、離れの一つを住いとして譲受け、その一部を茶室に作り替えたのが茶人として知られる江守奈比古氏である。淡交社発行の茶道雑誌『なごみ』に「私の茶室、用と美と」と題して江守氏は次のようにこの茶室を紹介している。

「戦後昭和二十三年頃に今の住居に移り住んだ。海岸の砂地で松ばかり生えているので謡曲道成寺の“花の外には松ばかり、暮れそめて鐘や響くらん”から〔花外亭〕と呼ぶことにした。それは十畳と四畳半ほどの広さの萱葺の座敷が付属していた。

この萱葺の一棟を改造して二畳を玄関に萱葺屋根を北にのぼして入り口を作り、南に一間の板縁を上げ、その西側二畳の部屋に待望の二畳の茶室を設けることにした。(中略) 十畳の部屋を板張りの応接間椅子席としたので、この狭い席は冬季座ることを好む客に対談の席として使っている。狭くて暖かで、茶を点てながら座談ができる。さて、わが家には奥の瓦葺の一棟にもう一つ部屋がある。六畳の広さの中に、ごく草庵風の残月床を設け、残りの四畳半でお茶を楽しむ席とした。これは主に夏の席である。

茶室設計も私の仕事の一つなので、使ってみて便利な席を考案するには、自分の茶室を持つことが、しばしば役に立つのである」と述べている。



鵜沼 82 号「戦時下の東屋」より

(佐伯忠男氏作図)

この記述によれば、茅葺の建屋は単独でなく、接続してその奥にも居住部分があったことを示している。また、文中この奥の瓦屋根の六畳間に残月床を設け四畳半の席としたものは平成元（1989）年に茅葺の方に移したため、開口部の一部が壁になったという。その3年のち奈比古氏は逝去された。

江守奈比古氏プロフィール



本名：江守 名彦（えもり なひこ 1902～1992）

奈比古はペンネーム、花外亭は号

東京日本橋生れ、両替商尾張屋の三代続いた江戸っ子
慶応大学経済学部卒、通産大臣秘書、観世会館社長、コ
ッス測定器社長、富士エンドレスベルト社長、港商事社
長、ニッポン放送常勤監査役、大磯ゴム監査役などを歴
任した実業家。

趣味の茶に関する著書多数、また茶室設計者としても知
られる。

主な茶室設計

自邸「花外亭」残月床付き四畳半茶室、書院付き二畳茶室「方庵」

ワシントンの日本大使館「一白亭」：1960年日米通商条約締結百周年記念事業

熱海 MOA 美術館「一白庵」：1982年岡田茂吉生誕百年記念

主な著書

『遠州』 アトリエ社 1939

『茶室』 海南書房 1949・1965

『茶道談義「茶道片語」「お菓子の話」』 1971

『茶室』 旭谷左右共著 朝日新聞社 1971

『茶会の心得帖』 千澄子共著 1995

『お茶の道具組み』 海南書房 1976

『茶室入門』 海南書房 1971・1977

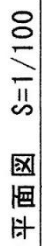
『茶室作法』 叢文社 1978・1982

『お茶の話：茶人のわびとさび』 海南書房 1967・1981

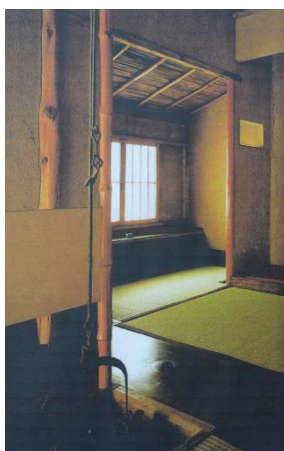
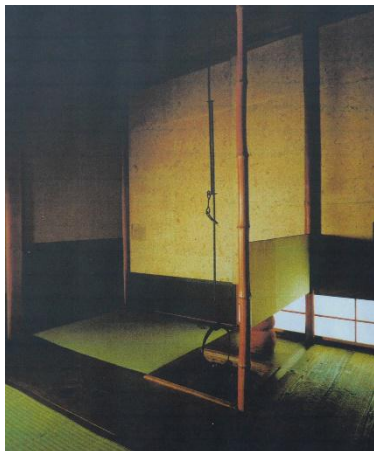
『茶室のはなし』 学習研究社 1982

『わびの研究』 川原書店 1989

『懷石料理とお茶の話（上・下）』 海南書房 1964・1981 中公文庫 2014



26



方庵



残月床付き四畳半



花外亭の扁額
板絵のある戸襖



おわりに

たまたま鵜沼商店街の有田商店へ寄ったら店主で当会会長の有田裕一さんが、江守さんのお宅が解体され始めたから一緒に見に行こうと誘われ、同行したのが8月24日の夕方であった。

行ってみると、塀の一部が撤去され庭の樹木は伐採されて重機が持ち込まれていて、建物は建具と畳がはずされた状態だった。

何年か前に、鵜沼を語る会として見学させていただいたことがあるが、その面影はまだ解体されずにいる茅葺屋根に僅かに残っているだけであった。

これは記録に残さねばならないと思い、インターネットで検索すると、神奈川建築士会の桑田由加子さんの調査報告が見付かった。

桑田さんは鵜沼松が岡在住の生粋の地元の建築家で以前、後藤分院の調査でもお世話になった事がある。

早速メールを入れて、このニュースをお知らせし、併せて図面、写真など資料の提供をお願いしたところ、快く応じて下さった。ここに篤く御礼を申し上げる次第である。

(おかだ てつあき)



参考文献・引用資料

桑田由加子氏撮影写真・実測図面

「新・建築探訪シリーズ:歴史的建造物探訪 No12 鵜沼江守邸」

神奈川県建築士会スクランブル調査隊 桑田由加子 記

『なごみ』1985年5月号「私の茶室、用と美と」江守奈比古 記

『かながわ風土記』231号「かながわの茶室」その76 中山 敏 記

『鵜沼・東屋旅館物語』 高三啓輔 著 博文館新社

『鵜沼海岸百年の歴史』 高木和男 著

『鵜沼』69号、82号、110号 鵜沼を語る会 会誌

藤沢市都市計画基本図「鵜沼海岸」1/2500 藤沢市発行

コーヒーブレイク Coffee Break コーヒーブレイク Coffee Break コーヒーブレイク

戦後 75 年に思う

今夏、読売新聞の「戦後 75 年、終わらぬ夏」と題した朝刊を読みました。戦争を経験された方々にインタビューされた特集で、そこで語り継ぐ人は、どなたも 90 歳以上で、その多くの方が戦中、激戦地に従軍され、いかに人間を人間と思わぬ畜生扱いの殺傷があったか、その作戦の目的も知らされず、ただ殺戮に加担させられた実態が報じられていました。

戦争を知らない世代が大多数となった今日、読売新聞の特集を読み、戦争を体験した世代の一人として、75 年前の中学 1 年生の時に見た悲惨な体験が思い出されます。幸いなことに、その後、戦争のない時代が続いています。

毎年 8 月 15 日の終戦記念日に日本武道館で開催される全国戦没者追悼式で、かつて上皇陛下がおっしゃられたお言葉「深い反省とともに」を今の天皇陛下は「深い反省の上にたって」と改められました。新時代を象徴する言葉です。

多くの先人たちの尊い犠牲の上に築かれた平和社会「今」を無事に生きていることに感謝しています。
(綿谷)

おつかれさま

いつ頃からか、芸能人同士が午後や夕方でも「お早うございます」と挨拶するのをテレビなどで見かける。また近ごろは「お疲れ様です」という言葉をたびたび耳にする。

朝、私が店に出ていると、若い女性が買い物に来て、いきなり「お疲れ様です」と挨拶されることがある。まだ店を開けたばかりなのに「お疲れ」といわれてしまうのだ。

元々、この言葉は上司が部下に、一日の労働の終りに“慰労”の意味で使ったものだ。しかし最近、若い人がこの言葉を「おたがい頑張ったね。じゃ、またね」という意味で仕事や部活が終わった後の“別れの挨拶”の慣用句として上下関係なく使っているのはイヤ味でなく、よく分かる。

だが「こんにちは」の代わりに使われると戸惑ってしまう。——こんな事が気になるのは年齢のせいだろうか。
(有田)

コーヒーブレイク Coffee Break コーヒーブレイク Coffee Break コーヒーブレイク

コーヒーズレイク Coffee Break コーヒーズレイク Coffee Break コーヒーズレイク

越谷達之助^{こしたになつのすけ}の経歴に新事実？

新型コロナウイルスで外出自粛要請のさなか 2020 年 4 月某日。昼頃、家内と尼寺（本真寺）を訪れた。ここのお地蔵さまに生後半年で逝った息子が分骨されていて、その日は祥月命日に当たっていた。

森閑とした境内に一人のマスクを掛けた年配の男性が本堂の前を行ったり来たりしているのが、ふと目に留まった。

私たちを見てなにか物問いたげな様子だったので、こちらから声を掛けると、ここに小学校時代の先生のお墓があるとインターネットで知ったので東京から訪ねて来たとのこと。

「その先生とは？」

「越谷達之助といって昭和 25 年から小学校で音楽を教わりました」

「どちらの学校で？」

「世田谷区立××小学校という当時出来たばかりの小学校です」

「お墓の場所をご存知ですか？」

「いいえ、知りません」

「では、ご案内しましょう。多分あの辺だったはずですよ」と私。

お墓は墓地の南の方ですぐに見つかった。何故なら私は会誌『鵠沼』114 号に「越谷達之助と忍節子」という一文を書いたとき越谷の墓に詣でたことがあったからだ。

男性とはそこで別れ、家へ帰って会誌を読み返すと越谷は 1946 年上京し世田谷区立新星中学校教員を経て青山学院の音楽教師になった、とあって、小学校で教鞭を取ったとは書いていない。先程の会話によれば中学以外に小学校教諭時代があったというのである。

その男性の氏名も連絡先も聞かず、こちらも名乗らずに別れてしまったのは迂闊だった。肝心の××小学校の校名も聞き流してしまったので覚えていない。新事実の可能性を調べるにも手がかりを全く失うという失態を演じたのであった。

越谷達之助については会誌を読んで頂きたいが、有名な石川啄木の詩「初恋」に曲をつけた人といえればお判りになるろう。（岡田）

コーヒーズレイク Coffee Break コーヒーズレイク Coffee Break コーヒーズレイク

境川河口の「目印」の松

大川 久（会員）

この松は、江ノ電の湘南海岸駅より海岸方面に行き、境川の西浜橋を渡り、堤防沿いを少し川上へ歩くと立っている。幹は太く、歩道の縁石に食い込んでいるほどである。遠くから見ると羽衣伝説に登場するような枝ぶりのいい松だ。周囲に松は無く、ポツンと一本、意味ありげに立っている。

この「目印」の松について、私の元職場の先輩から偶然話を聞いたことがあった。

この松は、松浦章（まつら あきら）氏のお宅の裏手、境川の堤防沿いの歩道にある。

松浦氏は、元平戸藩藩主の直系にあたり、松浦の姓を名乗って41代目になる。松浦氏は、現在80歳、戦後まも



境川右岸にある目印の松

なく小学校5年生の時に東京巣鴨からこの地に引っ越してこられた。

松浦氏によると、この松は子供の目からしても現在のような大きさに見え、江戸時代からの松だと聞いていると述べている。

境川の堤防は今のよう整備されておらず、歩道もなく、松浦邸の背後には竹林が生い茂っていたそうである。そんな中に松はそびえていたという。当時は他にも松は生えていたと思われるが、この松だけが生き残った。

松浦氏によるとこの松は、江戸時代から片瀬の漁師が船を止める目印として使い、当時の片瀬村の権利が及ぶ範囲の目印として利用されてきたのではないかと語っている。

松浦氏の住所は片瀬三丁目。1947年までこの辺りは片瀬村で旧鎌倉郡に属し

ていた。

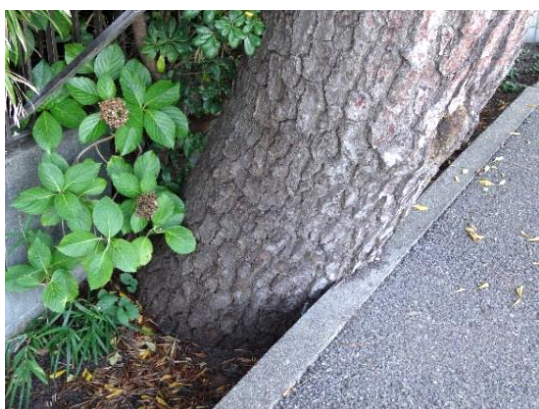
片瀬三丁目と境を接するのが鵜沼松が岡一丁目である。旧片瀬村と鵜沼村の境がこの辺りにあった。

境川は、古来蛇行を繰り返し、江戸地図からは現在の川筋が想像できない。このため、動かぬ松が「目印」として使われた可能性はある。

この松は、土地の所有が曖昧な細い僅かな土地にそびえている。当然、根は松浦邸の土地に伸びていると思われるが、松そのものは松浦氏の所有ではない。松浦氏は、立派な松なので市の保存樹林にできないか思案中であるという。

＊

聞き語りの松なので、異論があろうと思うが、気になる松なので一つの記録として書き留めた。
(おおかわ ひさし)



根元は道路に食い込んでいる



羽衣が架かっていてもよさそうな
見事な枝ぶり

人と人とのつながりは不思議

竹内 広弥(会員)

これまで「鵜沼を語る会」への問い合わせに幾度となく関わってきた。訊かれることの多くは昔の鵜沼のことで、調べても分からないことがほとんどだった。

昨年9月、渡部かほり会員から「富岡の美術館の桜井さんという方が塚本茂のことを訊いてきた。電話番号を教えてあるので、よろしく」と。何か所かを経て自分に回ってきた問い合わせだった。直接、桜井さんと話してみると、「知り合いの岡部さんが祖父の伝記を書いており、そこに塚本茂画伯が描いた祖父の肖像画を載せたい」ということだった。最初、塚本茂画伯について知りたいのだと思い、当会が15年ほど前にまとめた「鵜沼ゆかりの文化人」から塚本茂画伯のページをコピーして送った。その後、どのような冊子に掲載されているのか実物を見たいとの強い要望があり、短期間の約束で貸し出した。会誌『鵜沼』102号の「すわん會」のページでも塚本茂画伯を紹介しているので、これも送った。こんなやり取りが年末まで続いた。その後、「肖像画は岡部さんのものだが、塚本茂画伯の遺族に許可を得て伝記本に載せたい。なんとか連絡をとりたいと言っている」と話が変わってきた。

自分の知っている限りでは塚本茂画伯には息子さんが二人いて、次男の塚本実君は鵜沼中学の同窓生。彼も父親と同じく美術の道に進み、20代半ばにはパリの美術学校に学び、その後長いことパリで生活している。数年に一度くらい日本に戻ってくることは友人を通じて知っていた。たまたま中学の同窓会名簿を幹事としてまとめたばかりだったので、塚本実君の藤沢の連絡先に電話をしてみた。何度かしたが応答はなく、桜井さんには「ご子息の実君はパリ在住なので連絡はとれない」と伝えた。

年が明けると桜井さんからの連絡は岡部さん本人からに変わり、どうしても塚本実君と連絡をとりたい、と言ってきた。岡部さんは江戸時代の豪商の末裔で、地元で岡部温故館を開いているとのことであった。

1月も半ばを過ぎたころ再度、藤沢の連絡先に電話をすると応答があった。塚本実君の連絡先は妹さん宅であることが判った。これまでの経緯を話すと「兄は数日後に久しぶりに戻ってきます」とのこと。なんとというタイミングなのだろう。こうして実君からの連絡を待つことになった。

なぜ、塚本茂画伯が富岡の豪商であった岡部家当主の肖像画を描いたのか気になり調べてみると、画伯は同じ群馬県の生まれであった。前橋中学校在学中に画

家を志し東京美術学校へ進んだ。卒業後、鶴沼へ移り湘南中学（現湘南高校）の美術教師となった。戦後、湘南中学を去り画業に専念、藤沢市美術家協会設立、藤沢市展の発足に尽力した、とある。

塚本茂画伯と自分とのつながりは、鶴沼小学校入学前にある。6歳のころ画伯のアトリエに通っていた。不思議なことに70年以上たった今でもアトリエで描いた「にわとり」のクレヨン画が手元にあり、裏には塚本茂先生の評価がある。

故人となった渡部瞭会員も同じころ塚本茂画伯のアトリエに通っていた。自分には記憶がないが瞭さんはしっかり覚えており、これが二人の最



旧交の記念にと塚本実君から手渡された「バラ」初の出会いでもあった。もし存命なら今回の渡部かほり会員からの話は瞭会員に伝わり、彼の並外れた調査力をもってことに当たったに違いない。

ちょと脇道にそれたが、数日するとパリから戻ってきた塚本実君から電話があった。岡部さんとは前橋での塚本茂画伯個展の際に会っているので、よく存じ上げているとのことであった。自分からは幼いころの記憶としてアトリエの急角度な屋根、高い天井、塚本茂先生のバラの絵がとても印象的だったことを話した。

岡部さんには塚本実君と連絡がとれた旨、伝えた。これで役目を終えたと思っていたら実君からパリに帰る前に会いたい、とのこと。新型コロナウイルス感染が騒がれ始めた2月初めのことで、お互いマスク着用での数十年ぶりの再会であったが、すっかり父親の茂画伯の様相を呈していたので、すぐ分かった。

実君は「岡部さんとは藤沢で会った。ぜひ肖像画を描いて欲しいと頼まれ、その場で岡部さんのスケッチをした。パリに戻って制作する。仕事を得て帰ることになった」と嬉しそうに話していた。塚本茂先生のバラの絵が印象的だったと実君に話していたせいか、「今日、世界堂に寄って父が描いたバラの油絵を額に入れてきたので、受け取ってほしい」とプレゼントされた。

巡りまわってきた一本の問い合わせ電話がもたらした何十年ぶりかの塚本実君との再会。思いもよらぬ塚本茂画伯の「バラ」の絵のプレゼント。「人と人のつながりは不思議」という思いを強くした出来事だった。（たけうち ひろや）

源 希義 追想記

内田 進之助（会員）

源五郎希義（みなもとのごろうまれよし）。この名前を聞いても、知っている人はきわめて少ないであろう。

実は、彼は源左馬ノ頭義朝の五男で、平治の乱で父が敗死したあと、同母兄頼朝とともに伊豆に流され、そのあと土佐に移されて成長したが、二十数歳にして討ち死にした実在の人物なのである。

＊

—— 私は、もともと好奇心の塊で、なにごとにでも興味を抱くと首を突っ込まないと気がすまない。特に“歴史と地理”には異常な関心と執着を示す性癖が強い。その上、仕事で若い頃から色々な土地を訪れる機会が多かった。それを見抜いた神がそのような宿命を与えてくれたのかも知れない。

「希義」のことは、偶々縁あって高知にしばらく滞在している時に読んだ歴史散歩の案内書によって知った——

＊

平安時代末期（十二世紀後半）は、日本の歴史上きわだって激動とロマンに充ち溢れた時代である。源平の争乱と興亡の蔭には、男女上下多くの人々の喜怒哀楽が息づいている。

希義は、頼朝の実弟ながら遠い土佐の地で孤独のうちに成長し、兄の旗揚げを知って、勇躍呼応せんとしたが、平氏方の軍に襲われて青春の生命を絶たれたといわれている。

更に調べてみると、当時すでに彼には愛を交わした女性がいた。なんと平氏方の守護一族の娘と深い関係にあったらしい。この守護は流刑中の希義を監視し、決起した彼を攻めて死に至らしめているのだ。

しかし彼の死後、彼女が産んだ男児は「希望（まれもち）」と名付けられた。その後、全国を制覇した源氏の軍に平氏方守護一族は滅ぼされたが、希望は幸いにも母とともに救出されて、後に土佐の豪族となる「吉良氏」の祖となったという。

それにしても「希義」とは誰が名付けたのだろうか。「義を希う（こいねがう）」

とはまさに短くとも高邁であった彼の生涯にふさわしい名である。しかも唯一の遺児の名である「希望」とは、ついには実現しなかった彼の「望みを希って（こいねがって）」名付けられたのであろう。

とにかく私にとって、忽然と現れたこの歴史上の人物像は無限の愛着と夢の種をもたらしたのであった。

＊

晩秋の一日、高知市の東郊、介良（けら）地区にあると聞いた希義の墓所を訪れた。見渡しても人影は全くない明るく深閑とした道を辿り、古い石造の道標に導かれて、昼なお薄暗い山蔭の森の中に歩を進めた。

鬱蒼とした竹藪がやや開けた平地に達すると、自然石を三段重ねて積んだ石垣の台座に、下になるほど大きいやや厚めの丸い石がさらに三個重ねられて、その上に大きな卵を立てたような墓碑が唯一つ屹立している。本来は五輪塔であったのか。あるいは無縫塔といわれるもののな



源希義の墓

か。銘はない。元はあったのかも知れないが今は何も見えない。孤墳の石も付近の石垣や地表も、全面深緑の古苔に被われてしっとりとしている。厳かな湿気が肌に冷たい。時々微風に竹の葉がざわめくほかは、あたりは静寂そのものでももの悲しい粛々とした一画である。

「ああ、これが希義の墓なのか」

合掌して頭を下げると、胸打つ思いが切々と沸き起こってくる。毅然として直立するその孤高のたたずまいには、心ならずも若い生命を失わざるを得なかった男子の誇りと失意、数々の想念や恨みが宿り、私にも何か語りかけているかのようであった。

希義はこの辺りに住んでいたのであろうか。静謐な木陰にしばし憩っていると、在りし日の希義の姿が彷彿させられる。

独り流されたこの僻遠の地では、かなりの生活の自由も与えられ、又ひそかに源氏に好意を寄せる地元の豪族たちもいて、生い立ちについても教えられた。成長するに従い、御曹司としての自覚と誇りが育まれ、生来の寡黙のうちに、心中

には深く将来を期する情熱も秘めてきた。武芸の稽古に疲れ、勉強にもいささか倦んだひとときには、この美しい自然に抱かれて寝転がり、来し方行く末に想いを馳せることもあった。

館には愛する女もいる。守護の姪である彼女が希義のもとに派遣されたのは、身の回りの世話をしながら、彼を見張り、その日常を守護に報告するためであった。しかし、彼女自身も十余年前に父に伴われ一族とともに都から土佐にやって来たのだ。希義は彼女に初めて逢ったとき、今はもうほとんど忘れてしまっていた懐かしい都の香りを直ちに感じ取った。二人は互いに引きずられるように情熱にのめり込んだ。

彼女の父も、やむを得ず僻地に連れてきたわが娘を憐れみ、希義に対しては、何かと寛大で好意的となった。その人柄と器量を評価したのかも知れない。

やがて彼女が懐妊したちょうどその頃、兄頼朝が伊豆で旗揚げして、一旦は苦杯を喫したものの、間もなく富士川の合戦で平氏の大军を撃破し、鎌倉に拠点を築いたとの報せがもたらされた。

その上、異腹の弟義経も奥羽から駆けつけて合流したという話を聞かされると、父譲りの源氏の武士魂が呼び起こされ、長駆東国に向って脱出することを決意したのは、まさに天命としかいいようがない。しかし、この企みは早くも漏れた。妻からの急報も間に合わず、援軍の到着する前に、平氏守護方の軍勢に囲まれてしまった。

希義は密かに妻の父と語り合い、妻子の今後の無事を保証してもらおうと、独りで付近の仏堂に入って、静かに読経したあと自害した。

妻ははげしく嘆き、悲しんだであろう。共に愛を交わした時日はあまりにも短かった。思えば互いに出会いも別れもまさに宿命的であった。しかし、彼から培われた理性を辛うじて保ち、男児と信じたお腹の子を立派に育て上げようと、健気な決心をしたのだ。いたずらに嘆き悲しむだけの愚かな女性ではなかった。

底抜けに明るい風土に包まれたこの地の人々は、常にものごとくに深くこだわらない温かさで、この母子の安穏を見守り続けたのであろう。

果てしない追想を抱きつつ墓所を去り、そこから余り遠くない中学校の校庭にある「希義戦死伝承の地」の石碑を訪れたあと、今も変わらぬ土佐の風土のなかを帰途についた。



伝承地の石碑

＊

希義の死後、介良庄にいた琳猷（りんゆう）上人という僧が、その遺骸を自分の寺に葬ったうえ、遺髪を携えて鎌倉に赴き、頼朝に報告した。おそらく生前から希義を教導し、慈しんでいたのだろう。

頼朝は「亡魂再来」と大いに喜んだ上、琳猷の気概に感謝し、関東で一寺の別当職に任じようとしたが、彼は「希義公の墳墓を守り、冥福を祈り続けたい」と丁重に断って土佐に帰った。

平氏を滅ぼした頼朝は、新たに「西養寺」と称する寺院を現地に建立させ、その後歴代住職が希義の菩提を弔ってきたが、明治維新後の廃仏毀釈の余波で廃寺となり一時、村の小学校になった。最後の住職は還俗し姓を「西」名を「養次」と称して教員となったそうである。彼も又、琳猷と同じく時世におもねらない、いかにも土佐人らしい快男児といえよう。その学校も廃され、今はただ八百年前の哀愁を秘めて、山裾の竹やぶの中に、古色蒼然とした卵塔一基が、淋しく孤立しているのみである。

＊

一方、希義の遺児は鎌倉幕府にその正統性が認められ、土佐国内二郡のほか、三河国吉良庄にも領地を賜り「吉良八郎希望」と名乗ったという。

この吉良氏は高知市の西南方に聳える吉良峰に居城を築き、その子孫は実に二十代三百五十年間続いて、室町時代末期には土佐七守護の一人として全盛時代を迎え「南学」といわれる儒学の中心地ともなった。

その後、土佐国内の各豪族たちは互いに争乱を繰り返し、結局は長曾我部氏が四国全体も含めた実権を握ることになるのだが、この向学の伝統はその後の山内家の時代も通じて江戸時代末期にまで引き継がれ、明治維新の原動力の一つを醸成したのである。

—— この「吉良（きら）」と希義の墓所「介良（けら）」の地名の酷似の意味は何か。検討すべき問題点があり、また後世、吉良上野介で有名となった徳川幕府高家の三河吉良氏と土佐吉良氏との関係についても詳細は不明だが、ともに源氏一族の末裔であったことは間違いない。

＊

いずれにしても私にとって、この源希義・希望父子をめぐる数々の逸話と伝説についての興味は尽きないのである。

（うちだ しんのすけ）

源 希義 補遺

編集担当

介良地区は昭和 47（1972）年に高知市に併合された。市の東端に位置し隣接する南国市との市境になる。

高知市ではこの遺跡を市の文化遺産として積極的に PR するようになったとみえ、市の文化財課では「西養寺跡と源希義の墓」について以下の様に詳細な解説をホームページに載せている。

「西養寺（さいようじ）」は真言宗の寺院で「走湯山密厳院（そうとうざんみつごんいん）」と称した。源頼朝の弟希義（まれよし）の菩提を弔うために建立された寺院である。『吾妻鑑』によると平治の乱で介良庄に流されていた希義が、東国で挙兵した兄頼朝に呼応するのを恐れた平家は 1182（寿永元）年、平重盛の家人蓮池家綱、平田俊遠に命じて希義を年越山で討つ。希義の遺骸は後難を恐れて葬られることなく打ち捨てられていたが、生前希義の師であった介良庄の住僧琳猷（りんゆう）によって庄内に手厚く葬られた。琳猷は 1185（文治元）年伊豆国走湯山権現（静岡県熱海市伊豆山神社）の住僧良覚の仲介で頼朝に面会して事の次第を報告した。頼朝は琳猷に関東で一寺の別当職を与えようとしたが、琳猷は介良庄に帰って希義の菩提を弔いたいとしてこれを辞退した。そこで頼朝は琳猷の住所介良庄恒光名、津崎の在家の万雑公事停止の特権を与え、追善のため希義の墳墓の地に「一箇梵宇」を建立するとともに、供料米 68 石を与え、不足の場合には庄内の年貢米をあてることを介良庄の地頭兼預所源内民部太夫行景に命じた。

この「一箇梵宇」が西養寺で、2 年後には建立が遂げられた。希義の法名「西養寺殿円照大禪定門」が寺名の由来。

今は廃寺となって建物などはなく、山麓に石垣を築いてつくられた寺地と西方山林中に源希義の墓と伝える無縫塔がたち、その上方に希義神社がある。



希義神社

また、1992 年、介良地区が高知市に併合されて 20 年の記念事業の一環として墓の脇に五代藩主山内豊房の詠んだ追悼歌の歌碑が建てられた。

「いたはしや 同じ枝葉の末ながら 咲かで枯れにし 跡のしるしは」

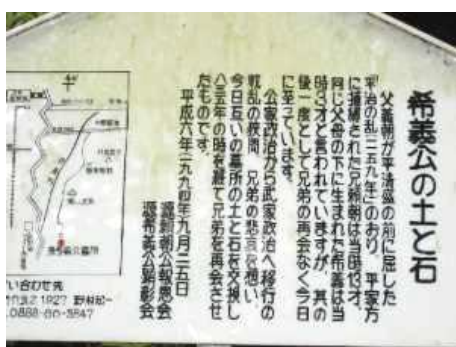
その 2 年後の 1994 年鎌倉に、翌 1995 年高知に、源頼朝公報恩会と源希義公顕彰会によって鎌倉の源頼朝の墓所と高知の希義の墓所の「土と石」を交換し合い各々の墓所には以下の様な同文の説明板が建てられた。

父義朝が平清盛の前に屈した平治の乱（一一九五年）のおり平家方に捕縛された兄頼朝は当時 13 歳、同じ父母のもとに生まれた弟希義は当時 3 歳といわれていますが、その後一度として兄弟の再会なく今日に至っています。公家政治から武家政治へ移行の戦乱の狭間、兄弟の悲哀を想い、今日、互いの墓所の土と石を交換し、八三五〈六〉年の時を経て兄弟を再会させたものです。

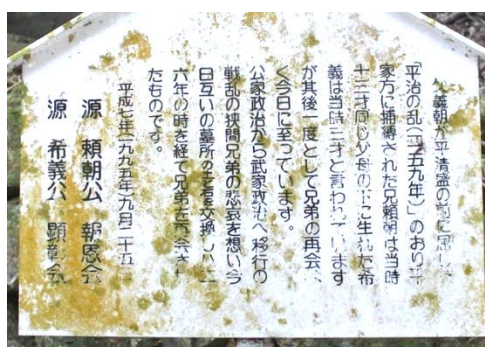
平成六〈七〉年九月二五日

源頼朝公報恩会

源希義公顕彰会



鎌倉：頼朝の墓の説明板



高知：希義の墓の説明板



頼朝の墓

所在地：鎌倉市西御門 2-5

今井達夫遺品最終整理

安達峰一郎博士顕彰会・大田区郷土博物館への資料寄贈

〈今井達夫遺稿活字化プロジェクト〉

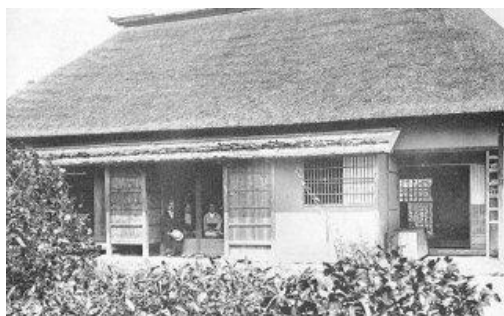
今井達夫没後、20 数年を経て夫人から遺品類を青木悠会員が預かったのは、2003 年頃で暫くは青木悠会員が預かっておられたが、2007 年に会として整理することになった。遺品類は未発表原稿や書きかけの原稿用紙、写真、雑誌、新聞の切り抜き、メモノート、手紙など雑多であった。代表作『水上瀧太郎』の手書き原稿その他を 2010 年 8、9 月に神奈川近代文学館へ寄贈。翌年 10 月、大田区馬込郷土博物館へ『馬込文学村二十年』の原稿ほかを寄贈した。それぞれ『鵠沼』102 号と 104、109 号に報告記事を載せた。

大作の活字化製本出版は『馬込文学村二十年』と『鵠沼物語』の二つ、手ごろな長さのものは会誌に順次掲載したが、これも 118 号を最後に完了した。原稿以外の遺留品を大きく分類すると、安達峰一郎に関するもの、尾崎士郎に関するもの、今井個人関係のものとなる。

安達峰一郎に関するもの

安達峰一郎は今井の母の実兄でオランダ・ハーグにある常設国際司法裁判所の所長を務めた国際法学者。1934 年アムステルダムで死去、オランダは国葬の礼で功績をたたえた。この人の伝記『ハーグにささぐ』を今井は 1966 年山形新聞に連載したが、その執筆のために集めた資料や写真。

安達峰一郎に関する施設として、安達峰一郎記念財団（東京）、山形大学地域社会研究所安達峰一郎研究資料室、安達峰一郎博士顕彰会として生家（對賢堂）を管理する山辺町教育委員会とがある。地元が一番適切であろうと安達峰一郎博士顕彰会がある山形県東村山郡山辺町教育委員会に電話し、上記のような資料があるが寄贈を受けるかを問い合わせたところ、受領したいと回答があったので 2020 年 7 月 21 日、山辺町教育委員会宛に郵送。数日後に鄭重な礼状と受領書が届いた。



生家 現：安達峰一郎記念對賢堂

令和2年7月27日

鵜沼を語る会 様

安達峰一郎博士顕彰会
会長 遠藤 直幸

お 礼 状

拝啓 時下ますますご清祥のこととお喜び申し上げます。

日頃から安達博士顕彰事業につきましては、格別のご高配を賜り、厚くお礼申し上げます。

また、このたびは、安達峰一郎博士に關係する資料を賜り、重ねてお礼申し上げます。

ご寄付を賜りましたものにつきましては、町教育委員会、町ふるさと資料館とも協議し安達峰一郎博士生家及び山辺北部公民館内の展示室等へ展示を考えてございます。

今後とも当会へのご支援を賜りますことをお願い申し上げ、お礼のごあいさつとさせていただきます

最後になりますが、貴方様のますますのご発展とご健勝をお祈り申し上げます。

敬具

寄 贈 資 料 受 領 証

令和2年第 1号

令和2年 7月27日

鵜沼を語る会 様

安達峰一郎博士顕彰会
会長 遠藤 直幸

令和2年 7月21日付で申し込みありました「安達峰一郎博士関係資料のご寄贈」について、ありがとうございます。

品名	・安達峰一郎記念館パンフレット
枚数	・安達博士回顧30周年展パンフレット ・写真 26葉 ・安達きみ親歴書 ・鵜沼105号

山辺町教育委員会 安達峰一郎博士顕彰会
からの礼状と受領書

尾崎士郎に関するもの

今井は盟友であった尾崎士郎の伝記が書きたかったらしく、書きかけの原稿や新聞の切抜き、尾崎夫人の手紙、メモなどが残っていた。この尾崎士郎に関する資料は旧会員の土岐臣道さんから大田区立郷土博物館の方へ訊いてもらったところ、是非受け入れたいとの返事を得たので2020年7月24日、土岐さん経由で大田区立郷土博物館に、これらの資料を寄贈、礼状、受領書が届いた。

謹啓

時下、ますます御清祥のこととお喜び申し上げます。

かねてより、当館の事業に関しましては、格別の御理解、御配慮を賜り、厚く御礼申し上げます。

また、このたび当館に御寄贈いただきました資料につきましては、未永く活用させていただく所存でございます。ここに書面をもちまして御挨拶申し上げます。今後とも、御高配賜りたく、よろしくお願い申し上げます。

敬具

令和二年七月三十日

大田区立郷土博物館
館長 並木 正博

鵜沼を語る会 御中

大田区立郷土博物館からの礼状

資料受領証

大田区立郷土博物館

【氏名】 鶴沼を語る会(岡田哲明) 様

【住所】 〒251-0038 神奈川県藤沢市鵠沼松が岡3-22-3

TEL 0466-22-3038

番 号	品 名	数 量	備 考
1	尾崎清子筆 今井達夫宛書簡(便箋5枚)	1	
2	今井達夫ノート「尾崎士郎・メモ」	1	
3	今井達夫草稿メモ(尾崎士郎について) 12枚(ます屋製、11枚 朝日放送 1枚)	1	
4	今井達夫草稿「尾崎(2)」 25枚(ます屋製原稿用紙) コピー	1	
5	今井達夫草稿「尾崎士郎(六)」 25枚(ます屋製原稿用紙) コピー	1	
6	新聞切り抜き「続・小説四十六年」尾崎士郎④(昭和38年9月12日)、尾崎士郎⑤(9月19日)	2	
7	ビール共通券(大田区南馬込 三正商店→藤沢市鵠沼海岸 有田商店)	1	

上記のものを博物館資料として受領しました。

受入年月日 令和 2 年 7 月 30 日

大田区長 松 原 忠 義



大田区立郷土博物館からの受領書

今井個人関係のもの

今井達夫幼少期の写真、新聞雑誌の切り抜き、執筆文掲載雑誌、スワン会など
今井個人関係の雑多な資料は鵠沼公民館郷土資料展示室に委託した。



今井達夫(水兵帽)7歳



今井達夫1歳前後か

鵠沼雑記（四）

古志 秋彦

芥川龍之介の作品にも「鵠沼雑記」という小品がある。文豪の題名を借用した形になって恐縮だが、芥川のは四百字詰め原稿用紙で五枚程度のごく短いエッセーである。その冒頭の一節は次のようになっている。

僕は鵠沼^{くげぬま}の東屋^{あづまや}の二階にちっと仰向け^{あふむ}に寝ころんでみた。その又僕の枕もとには妻^{つま}と伯母^{おば}とが差向ひに庭の向うの海を見てゐた。僕は目をつぶったまま、「今に雨がふるぞ」と言った。妻や伯母^{おば}はとり合はなかつた。殊に妻は「このお天気に」と言った。しかし二分とたたないうちに珍らしい大雨^{たいう}になってしまった。

芥川が東屋に滞在してこの作品を書いたのは、死の前年の大正十五年だった。

その東屋は、昭和に入って日中戦争が泥沼化した最中に廃業したが、最近その正門跡の近くに藤沢市によって、記念の石碑が建設された。碑は高さ一・五メートル、小松石の表面をみがき、ヨットの帆をイメージして設計された。碑面には佐江衆一氏の筆で

「文人の逗留した

東屋の跡」

の文字が二行に彫られている。

碑の左側に次の説明板がある。

旅館「東屋^{あづまや}」

明治後期から昭和初期にかけて、多くの文人が来遊した旅館「東屋」は、鵠沼のこの地にあった。記念碑の右側を正門として、海岸まで広がる約二万平方メートルの広々とした敷地に、松林と池を配し、本館及び離れが点在していた。

尾崎紅葉の硯友社の文人をはじめ、相次いで逗留した近代文学の旗手たちは、この宿で思索し、想を練り、執筆し、時には談笑し、それぞれの文学世界を創造した。志賀直哉、武者小路実篤らによる白樺派の揺籃の地でもあり、芥川龍之介の短編小説「蜃気楼」は、当時の鵠沼海岸の風景を幻想的に描いている。

旅館「東屋」は明治二五年頃、伊東将行・長谷川ゑいによって創業され、関東大震災にあうも再建され、戦時色の強まる昭和一四年に半世紀にわたる歴史を閉じた。

記念碑建立にあたっては、日本近代文学に果たしたその名を惜しむ神奈川文学振興会の提唱を受け、鵜沼の地域史研究グループ「鵜沼を語る会」の協力を得た。

二〇〇一年三月

藤沢市教育委員会

そして関東大震災前の建物配置図の下に、逗留した主な文人として、斎藤緑雨、徳富蘆花に始まる二十五人の名が刻まれている。志賀直哉、谷崎潤一郎、芥川龍之介ら近代文学史に名を残した作家は、ほとんどが登場しているといっている。

ここには名が出てこないが、北原白秋、堀辰雄らを含めて、東屋に来遊した文人、学者、ジャーナリストの総数は百人近くにもなるだろう。

＊

説明板に記されているように、この東屋は明治二十五年ごろ伊東将行という人によって建てられた。創業のいきさつは高三啓輔著『鵜沼・東屋旅館物語』（博文館新社）に詳しい。一九九七年に出版されたこの本がきっかけになって、あいまいだった東屋の所在や歴史が明らかになり、記念碑が設立されることになったといっている。

もともと鵜沼は、そのほとんどが砂丘と、その間に出来た湿地の荒蕪地^{こうぶち}で、江戸末期には幕府の鉄砲場として大砲の試射が行われていた。明治になってから、大分藩主につながる大給近道^{おぎゅう}（子爵）が払い下げをうけたが、海岸までの二キロの間に人家はなかった。明治二十年になって東海道線が国府津まで開通し、同二十四年に大隈重信が鵜沼に避暑のため来遊して以来、ようやく人々の往来も盛んになったという。

そのころ急に鵜沼の地が脚光を浴びる問題が起こった。いわゆる「鵜沼御用邸」の誘致運動である。結局、明治二十六年、御用邸は同じ相模湾に面した葉山に決まり、鵜沼御用邸は幻と終わったが、この御用邸誘致計画について、最初からそんな話はなかったという人もいて、真相はいまでは不明である。しかし現在でも「鵜沼御用邸説」が一部の人には信じられていて、それが東屋創業につながっていったというのである。

大地主の大給子爵は、内閣賞勲局総裁として明治政府に勤め、当時の宮内省と

も関係が深かったから、こんな話が出たのかも知れないが、鵜沼にとっては不在地主だった。実際の差配^{さはい}を任されていたのが、地元の木下米三郎であり、伊東将行であった。かれらは広大な土地を管理し、貸付けたり、売買の労をとったりしていた。

いま「広大な」と書いたが、大給家の土地は約六万坪もあった。現在の江ノ電鵜沼駅から小田急江ノ島線の鵜沼海岸駅までの間、地番でいうと鵜沼松が岡一丁目から四丁目にわたる全域が、ほぼすっぽり入っていた。御用邸用地としては、いささか広すぎたのである。それに海からも、やや離れていた。むしろ候補地としては、のちに出来た小田急線から海寄り、鵜沼館^{こうしやう}、東屋、中屋などの旅館や別荘が建った松林一帯のほうが適当だったと思われる。

この広大な「鵜沼御用邸予定地」を活用するという形で、将行の東屋経営が始まった。最初は茅葺平屋の貸別荘風の数軒だったらしいが明治三十年ごろには重厚な瓦葺総二階の本格的な旅館が建てられた。庭先は芥川が書いているように、海までつながっていた。そしてここを拠点として、将行らは精力的に鵜沼の開発を進めていったのである。

＊

東屋が文士宿として成功した一つの理由は、伊東将行が東京牛込の料亭「吉熊」の女中頭だった長谷川ゑいを東屋の女将としてスカウトしてきたことであった。

吉熊は尾崎紅葉の硯友社と関係が深く、ゑいはここで文士たちに対する客あしらいを身につけた。高三啓輔『前掲書』によると「残された写真で見るゑいは、思わずその写真を持ち直して見たくなるほど美しい。小柄で細面の、目の大きい人だが、単に美しいというだけでなく、何ともいえぬ気品がある」という。現在のタレントでは似ている人はいないが、昭和二十年代の女優でなら「桂木洋子という人がいた」と書かれている。

多くの文人たちを引き付けたのは、その美貌と接客の巧みさだったであろう。文士の気質をよくのみ込み、決して不快な思いをさせなかった。もっとも飛び込みできた里見弴は、最初、風通しの悪い六畳間に通され、のちに一階七号室に移されるということもあった。この七号室の二階が冒頭の芥川のいた部屋で、同じ六畳間ではあったが、本館の南端になっていたから、鍵の手に四尺の縁が付いていた。江の島がよく見え、東屋でも最上級の部屋であった。

東屋の長谷川ゑいは伊東将行の権妻で、東京日本橋には本妻の伊東ぬいがいた。このことが、のちに東屋の経営権をめぐる複雑な影をおとした。

大正五年多いが、同九年将行がなくなり、東屋の経営は多いの姉たかから甥の長谷川欽一に引き継がれる。しかし、もともと芸術家気質の欽一は、旅館経営は自分の肌に合わないと考え日中戦争が始まって三年目の昭和十四年九月、半世紀にわたる東屋の営業を閉じた。結果的には、これは正解だった。戦争の激化とともに物資不足は深刻になり、旅館経営が困難な時代になったからである。最後の客となったのは武者小路実篤だったという。

一方、将行の末娘政子は東屋に隣接して、昭和八年「鵠沼ホテル」を開き、東屋に代わる勢いで発展していった。たとえば十四年三月、与謝野晶子が鎌倉の寺で寛（鉄幹）の法事をしたあと、江ノ電鵠沼駅からタクシーで東屋へ向かったことがあった。寛、白秋らとともに東屋で歌を詠んで過ごした日を懐かしんでのことだった。「東屋へ行ってください」と告げたにもかかわらず、車が横付けされたのは鵠沼ホテルの玄関だった。地元でも、かつての東屋よりも鵠沼ホテルのほうが有名になっていた。そして東屋のほうは、その半年後に廃業してしまうのである。

戦後、この鵠沼ホテルのあとに、将行の養子となって伊東家を継いだ政子の子、将治が割烹旅館を開いて「東家」という看板を掲げた。共通する「東」は伊東将行に因むという。このため「東屋」と「東家」との混同が生じ、文学史にも誤った記述が少なからず散見されるようになる。それとともに、所在地までが一緒にされ、長い間に東屋の正しい場所は人々の記憶から風化していった。ようやく六十年後、かつての正門近くに建てられた「東屋記念碑」は、これを正しく伝えたいという地元の人々の熱意が実ったものとなった。

いま東屋の跡地は、大きな駐車場を含めた四十軒ほどの宅地に分譲されていて、当初は海に接して一万坪近くあったといわれる敷地には、建物を含めて東屋の面影を偲ばせるものは、ほとんど残っていない。幻と終わった鵠沼御用邸と同様、東屋もまた歴史の泡沫にすぎなかったかのようである。「東屋記念碑」建設によって、芥川らの足跡はやっと確実な形として残されることになったといえよう。

編集注：古志秋彦は故伊藤聖会員の詩人としてのペンネームである。

本稿は詩誌第3次『同時代』第10号（2001年6月号）に掲載されたのをご遺族の了解を得て転載するものである。

文中にある『鵠沼・東屋旅館物語』の著者高三啓輔氏は当時、鵠沼を語る会会員であった。



最初の旅館 鶺鴒館 (第 0120 話)

對江館鶺鴒 (第 0129 話) **貸別荘風の東屋** (第 0132 話)

渡部 瞭

「鶺鴒館」

大鋸の旅籠「大鈴木」を移築

1886(明治 19)年、鶺鴒海岸海水浴場が開かれることになり、三觜小三郎・川上九兵衛・加藤徳右衛門らが、鶺鴒海岸に藤沢宿大鋸の旅籠「大鈴木」を移築し、翌年「鶺鴒館」として開館したとある。

この 3 人はどういう人物だったのか。

- ・三觜小三郎＝羽鳥、大庭、稲荷、辻堂、鶺鴒連合戸長。羽鳥の名主＝三觜八郎右衛門本好の長女＝まきの夫で菖蒲沢の亀井家より入婿した
- ・川上九兵衛＝藤沢宿の住人。出版業を営んでいたようである
- ・加藤徳右衛門＝引地の地主で豪農。「伏見屋」という酒屋を営んでいた。後に藤沢町会議員

この時代、すなわち 1884(明治 17)年の郡区町村編成法の改訂から 1889(明治 22)年に市制町村制が施行されるまでの間は、鶺鴒村は羽鳥、大庭、稲荷、辻堂と連合し、官選となった戸長には羽鳥村の三觜小三郎が就任していた。

最初の旅館「鶺鴒館」

こうして 1887(明治 20)年に鶺鴒村初の旅館、「鶺鴒館」が開業する。場所は現在の鶺鴒海岸 2-11。「ニューマンション」のあたりである。読みは「こうしょうかん」が一般的だが、「くげぬまかん」とルビを振った書物もある。

ここに伊東將行・三觜直吉が職を得たとある。三觜直吉とは、三觜小三郎・まき夫妻の長女(一人っ子だったらしい)＝ふきの夫で、寒川宮山の金子家より入婿した。

同館は日清戦争の送還患者転地療養施設として指定されたりした。明治時代い

っぱいの記録
は見られるが、
大正時代に入
ってからの記
録は見つから
ない。大正に入
って早々に廃
業したと思わ
れる。



大鋸の旅籠「大鈴木」を移築した鵜沼最初の旅館「鵜沼館」

鵜沼館年表

西暦	和暦	月	日	記 事
1886	明治 19			三觜小三郎・川上九兵衛・加藤徳右衛門ら、鵜沼海岸に藤沢大鋸の旅籠「大鈴木」を移築
1887	明治 20			「鵜沼館」として開業。伊東將行・三觜直吉、同旅館に職を得る
1892	明治 25			『全国鉄道名所案内』に鵜沼海水浴場を紹介。待潮館、鵜沼館二軒の旅亭ありと記す
1895	明治 28	1	15	東京予防病院長=松島玄景、日清戦争の送還患者転地療養施設として鵜沼館を選定
1895	明治 28	4	16	傷病兵慰安のため鵜沼館前に数十本の烟花を打揚げ且撃剣会を催す
1898	明治 31	8	25～30	能楽師=梅若実、鵜沼館に滞在
1902	明治 35	2	24～28	民俗学者=柳田国男(1875-1962)、鵜沼館に赴き実業学界の原稿を執筆
1912	明治 45	6	1	武者小路実篤、のちに妻となる房子と鵜沼に行き、鵜沼館で昼食をとる

[参考文献]有賀密夫：「明治初期の鵜沼村」『わが住む里』第43～45号(1992～1994)

對江館鵠沼

「對江館鵠沼」とは 1890(明治 23)年<1889(明治 22)年という説もある>から 1910(明治 43)年までの約 20 年間、鵠沼海岸二丁目で営業していたリゾート旅館である。経営者は井上大次郎と伝えられるが、いかなる人物であるかは調べが付いていない。屋号も 1892(明治 25)年刊行の『全國鐵道名所案内』の鵠沼海水浴場紹介に「鵠沼海水浴場は藤沢停車場を距る二十余町の海浜に在り浜は一面の砂地にして稚松処々に生じ岸は遠浅にして水清く波静かなれば婦女子の水浴を取るには最も適當にして少しも危険の恐なし此地紳士紳商の別荘の他に待潮館、鵠沼館二軒の旅亭ありて東に江之島を軒の内に望み前は渺茫たる太平洋に面し風景稍や賞するに足る」と記されており、この「待潮館」というのは「對江館鵠沼」だろうと思われる。今のところ「待潮館」は同書しか記された例を見ていない。また、略字(現行当用漢字)を用いて「対江館」とする場合もある。写真も見つかっていないが、1901(明治 34)年 8 月に日本画の河合玉堂画伯が滞在し、『清風涼波』という絵巻物を制作した。それを見ると、純和風の二階建てだったことが判る。

この旅館は 1910(明治 43)年頃田中安・カネ夫妻によって買い取られ、「中屋」と改名して旅館として営業を続けるほか、敷地内に 6 軒ほどの貸別荘が設けられ、1941(昭和 16)年までは営業していた。建物は戦後まであり、二男の上村家が住んでいたが、1974(昭和 49)年、特別養護老人ホーム「上村鵠生園」に生まれ変わった。「中屋」以後については別項を立てる。

對江館年表

西暦 和暦 月 日	記 事
1890 明治 23	井上大次郎、鵠沼海岸 2 丁目に對江館鵠沼(待潮館とも)開業(1889 説も)
1892 明治 25	『全國鐵道名所案内』に鵠沼海水浴場を紹介 「待潮館、鵠沼館二軒の旅亭あり」と記す
1901 明治 34 8	画家=河合玉堂(1873-1957)、對江館に来遊 『清風涼波』の絵巻物を残す
1910 明治 43 8 1	『女學世界』に上原綾子が『鵠沼海岸半日の清遊』を掲載。對江館の名がある
1910 明治 43 頃	田中 安・カネ、對江館を買い取り、「中屋」と名を変えて営業

貸別荘風の東屋

「鵠沼海岸別荘地開発記念碑」には「將行益奮勵二十五年更營一旅館曰東家既營而築之既築而擴之樓觀精工巨麗不靡環館皆松造池蓄水清洒可掬前面隔渚臨江島呼欲磨其富海山眺望之勝如此館不多見其比況室清魚美欲待至切宜矣伴此地之發展日極其繁盛」すなわち「將行益々奮勵し、二十五年更に一旅館を営み東家という、営みてこれを築き、築きてこれを拡ぐ、樓觀は精工巨麗にして靡らず、館皆松を還らし、池を造り水を蓄え、清洒掬すべし、前面渚を隔てて江の島に臨む、呼びて其の富を磨かんと欲す、海山眺望の勝此の館の如きは多く其の比を見ず、況んや室清く、魚美しく、欲待切に宜し、此の地の發展に伴い其の繁盛日に極まる」とある。

意識すれば「將行さんは、ますますがんばって、明治 25(1892)年に「東家（東屋とも書く）」というもう一つの旅館を営業しました。初めは小さかったのですが、だんだん増築して拡げていきました。建物はとても良くできていて大きく素晴らしかったのですが、贅沢すぎることはありませんでした。それぞれの建物の周りには松の木を植え、庭には池を掘って水を蓄えましたが、思わず手を入れたくなるほどきれいな水でした。旅館の前には波の打ち寄せる海岸を隔てて江の島が手に取るように望めます。何と贅沢な眺めでしょう。この旅館のように海や山の眺望が素晴らしいところは、他には余りないでしょう。その上客室が清潔で、魚料理がおいしく、もてなしが素晴らしいのです。この地の發展に伴って、この旅館の繁盛はとても評判になりました。」とでもなろうか。

碑の記述に従うならば、將行は 1892(明治 25)年にそれまで勤めていた「鵠沼館」に加えて一旅館「東家」を創業したことになる。別説によれば、この段階では旅館というよりも貸別荘だったという。

1898(明治 31)年 8 月の『風俗画報』には、壮大な東屋のイラストが掲載されている。わずか 5 年ほどで「営みてこれを築き、築きてこれを拡ぐ」ことになったのであろう。1939(昭和 14)年に東屋は廃業するのであるが、その際に宿帳を初めあらゆる資料や什器備品類は処分されたらしく、不明な部分もかなり多い旅館なのである。

第一にその屋号についても「東家」なのか「東屋」なのか「あづまや」なのか「あづま家」なのか「あづま屋」なのか、様々に書かれて統一されていない。『鵠沼・東屋旅館物語』を著された高三啓輔氏(元「鵠沼を語る会」会員)は、東屋の領収書を発見され、そこに「東屋」とあることを根拠に「東屋が正しい」とされ

ている。しかし、「鵠沼海岸別荘地開発記念碑」には「將行益奮勵二十五年更營一旅館曰東家」とあるし、芥川龍之介をはじめ、多くの文人の作品には「東家」が多用されている。同旅館が発行した絵はがきにも「相州鵠沼東家旅館繪葉書」とある。また、同旅館が出入り職人に配った印半纏の襟には「あづまや」と染め抜かれている。

「文士宿」として知られる同旅館だが、先述のように宿帳が残されていないので、どういう文士がいつからいつまで滞在したのか、明確な記録がない。これまで判明した文士の記録は、小山文雄氏の永年にわたる調査に負うところが多い。膨大な各種文学作品の中から、あるいは文士たちが交わした書簡の中から東屋に関するものを抜き出し、整理したものである。従って、実際にはその数倍の文士が宿泊したと思われる。残念ながら不明な部分が多いのである。

それによれば、東屋に滞在したことが最初に判る文士は小説家=広津柳浪(1861-1928)で、1897(明治30)年秋に東屋に滞在し、小説『くされ縁』を執筆している。この年には貸別荘から旅館という性格になっていたのであろう。

東屋略年表

西暦	和暦	月 日	記 事
1892	明治 25	11	伊東将行、行遊客の誘致策として貸別荘風の東屋建設
1897	明治 30		旅館東屋新築。長谷川ゑい、この頃経営に参加か
1898	明治 31	8 20	『風俗画報』に、壮大な東屋のイラスト掲載。鵠沼は「皆茅 屋にして閑雅愛すべし」
1905	明治 38	6 11	横浜貿易新報、東屋旅館の紹介記事（鵠沼海岸の旅館は東屋のみになる）
1906	明治 39	10 25	長谷川欽一、本籍を東京から鵠沼村 6642 に移す
1906	明治 39	12 30	長谷川ゑい、戸主=長谷川欽一から分家。本籍は鵠沼 6642 と変わらず
1906	明治 39		埼玉県吹上出身の医師=福田良平、伊東将行の招聘で東屋近くに鵠沼海浜病院を開く
1907	明治 40	1	長谷川たか、戸主=長谷川欽一から分家。本籍を鵠沼村 7365 に独立
1909	明治 42	3	医師=福田良平、長谷川ゑいの妹=蝶と結婚
1916	大正 5	1 7	東屋の初代女将=長谷川ゑい、腸閉塞のため鎌倉の病院で没。姉=たか、2 代目女将となる

1920 大正 9 7 29	伊東将行、脳溢血で没。享年 75 歳。慈教庵で葬儀、墓碑も建つが、正式の墓所は青山墓地
1923 大正 12 9 1	鵜沼海岸 6642 東屋倒壊津波浸水[現在の藤澤]
1924 大正 13	東屋、当時としては数少ない硬球のテニスコートを 2 面、敷地の一角に造る
1924 大正 13 末	現在杉沢邸となっている「東屋の離れ」、建築
1924 大正 13	東屋・中屋、再建して営業
1927 昭和 2	伊東将行の孫=右近一夫、東京日本橋から東屋別荘「イー 1 号」に転居
1933 昭和 8	伊東将行の末娘=政子夫妻、東屋西方に隣接して「鵜沼ホテル」を開く
1938 昭和 13 9 7	東屋 2 代目女将=長谷川たか、没。墓所：本眞寺
1939 昭和 14 9 11	長谷川欽一、東屋を廃業
1939 昭和 14 9 12	『東京日々新聞』、「突如廃業の声明」「鵜沼名物”文士宿”」と東屋の廃業を報道
1950 昭和 25	伊東将行の孫で養子の伊東将治、東屋跡西方、鵜沼ホテル跡地に割烹料亭「東家」を開く
1957 昭和 32	杉沢家、「東屋の離れ」を買い取り、辻堂より移住
1968 昭和 43	東屋貸別荘「イー 4 号」、改築
1984 昭和 59	東屋貸別荘「イー 2 号」、改築
1985 昭和 60 6 24	元東屋主人=長谷川欽一、没 享年 85 歳
1997 平成 9 11 25	高三啓輔(会員)、『鵜沼・東屋旅館物語』刊行
1997 平成 9	伊東将行の孫=右近一夫、没
2001 平成 13 3 22	「東屋記念碑」設置記念式典(鵜沼公民館)→除幕式(鵜沼海岸 2-8-26)
2005 平成 17 8 5	東屋旅館海浜口門柱、鵜沼公民館裏庭に移設。跡地にプレート設置
2005 平成 17 11 29	旧東屋旅館海浜口の石畳改修工事完成。門柱跡にプレート設置(市教委)

[参考文献]

小山文雄：『個性きらめく』/『続個性きらめく』 高三啓輔：『鵜沼・東屋旅館物語』

<故渡部瞭会員『鵜沼を巡る千一話』第 0120/0129/0132 話より>

「鵠沼を語る会」活動の記録

(令和2年1月～11月)

1月例会 新年会 「たか亭」

1月16日(火) 11時30分～14時：新年会 17名出席

新年会に先立ち1月例会。会誌『鵠沼』119号を配付。119号は昨年12月30日発行だが、印刷は本年1月8日、製本を1月14日に行った。

新年会は各人の近況報告、恒例のビンゴゲームで盛り上がった。

1月運営委員会

1月28日(火) 10時～12時 第1談話室 5名出席

2月例会

2月11日(火) 10時～12時 第1談話室 12名出席

— 会誌119号配付（1月例会欠席の方へ） — 新年会 報告

— 次年度からの会の運営について話し合う。会誌制作はチームで行う。

『お話』 藤沢の有形文化財について岡田哲明会員に話してもらった。

2月運営委員会

2月25日(火) 10時～12時 第1談話室 5名出席

3月例会

3月10日(火) 10時～12時 第1談話室 新型コロナ感染防止のため中止

3月運営委員会

3月24日(火) 10時～12時 第1談話室 新型コロナ感染防止のため中止

4月例会

4月14日(火) 10時～12時 第1談話室 新型コロナ感染防止のため中止

4月運営委員会

4月28日(火) 10時～12時 第1談話室 新型コロナ感染防止のため中止

第34回定期総会・5月例会

5月12日(火) 10時～11時 第1談話室 新型コロナ感染防止のため中止

開催中止につき総会議案書（案）を4月下旬に会員へ送付し、異議がある場合は5月11日までに申し立てるよう依頼。異議なしで議案はすべて可決。

5月運営委員会

5月26日(火) 10時～12時 第1談話室 新型コロナ感染防止のため中止

6月例会

6月9日(火) 10時～12時 第1談話室 新型コロナ感染防止のため中止

6月運営委員会

6月30日(火) 10時～12時 第1談話室 6名出席

7月例会

7月14日(火) 10時～12時 文化活動室 13名出席
— 今年度年会費について — 今年度活動について — 会誌『鵜沼』第120号について — 今年度の公民館まつりはコロナ禍で中止となった。

7月運営委員会

7月28日(火) 10時～12時 第1談話室 7名出席

8月例会

8月11日(火) 10時～12時 文化活動室 13名出席
— 10月史跡めぐり・清浄光寺はコロナ禍で団体拝観が中止なので順延とした。
— 会誌120号の掲載内容並びに制作スケジュールについて
『お話』 鵜沼郷土資料展示室で開催中の「鵜沼ゆかりの世界的芸術家 — 長谷川路可」展を内藤喜嗣会員の説明で見学した。

8月運営委員会

8月25日(火) 10時～12時 第1談話室 5名出席

9月例会

9月8日(火) 10時～12時 第3談話室 12名出席
— 会誌120号の掲載内容並びに制作スケジュールについて
— 戦争特集の会誌91・111号を合併した特別号*が提案され了承される。
『お話』 延び延びになっていた3月例会で予定の「一遍聖絵と時衆の時代」について、小池清志会員に話してもらった。資料(レジュメ)配付
*会誌『鵜沼』特別号(第91号・111号合併)制作
戦後75年の節目にあたり『太平洋戦争—語り継ぐ戦中戦後の記憶』特別号を

120 冊制作。藤沢市内の小中高校、図書館(室)、教育関連部署 39 か所に配付。
特別号を戦争の記憶を後世へ語り継ぐ材料として活用してもらうことが目的。

9 月運営委員会

9 月 29 日(火) 10 時～12 時 第 1 談話室 6 名出席

10 月例会

10 月 13 日(火) 10 時～12 時 第 3 談話室 13 名出席

— 『太平洋戦争—語り継ぐ戦中戦後の記憶』会誌特別号を出席者に配付。

10 月 12 日に特別号についてタウンニュースの取材を受け、例会時に参加者の撮影があった。10 月 16 日号に記事が掲載された。

— 会誌制作チーム立ち上げ、編集・印刷・校正の担当決定。120 号の印刷室、製本場所の予約完了。

— 会誌 120 号の制作スケジュール決定。11 月 30 日 印刷、12 月 1 日 製本(第 3 談話室)、12 月例会で配付予定。

10 月運営委員会

10 月 27 日(火) 10 時～12 時 第 1 談話室 5 名出席

11 月例会

11 月 10 日(火) 10 時～12 時 第 3 談話室 13 名出席

— 江守邸のお話と映像 「鵜沼の茶室」といわれていた茅葺屋根の江守邸は 8 月に取り壊されたが、その前に内外を撮影して制作した二つの作品を鑑賞した。林秀治氏制作の詩情あふれる映像「AZUMAYA」と小山一彦氏の臨場感一杯の 3D 映像を楽しんだ。

— 会誌特別号配付後の反応について — 会誌 120 号の印刷原稿校正完了

— 来年度から貸し部屋の抽選方法がインターネットで行なわれる。

11 月運営委員会

11 月 27 日(火) 10 時～12 時 第 1 談話室 6 名出席

会誌『鵜沼』第 120 号制作(発行日：12 月 1 日 150 部)

<2020 年 12 月現在 会員数 38 名>

編集後記

- 中国で発生した新型コロナウイルスは、瞬く間に世界中に拡散。私たちの日常生活も大きな制約を受け、例会も自粛、公民館まつりも中止になった。6月末発行予定の120号も年末になってしまったが、何とか発行出来たことを喜びたい。
- 葛巻義敏は晩年、妹の葛巻左登子さんとともに鵜沼海岸3丁目に住んだ。左登子さんは鵜沼での龍之介の医師だった富士山^{ふじたかし}博士と共に「鵜沼を語る会」の会員で龍之介について興味深い話をして下さった。義敏没後、左登子さんは残された龍之介の資料を大切に保管されていた。それは東京で火災に遭い周辺が焼けこげてはいたが判読に支障はない状態だったものである。左登子さんが体調を崩し医療施設に入る際、これらの資料一切を藤沢市に寄託する代わりに彼女の生活を市が責任を持つことになった。その資料は神谷会員が取り上げた中国旅行の手帳や少年期の手作り雑誌「日の出界」などが含まれ現在、藤沢市文書館に収蔵されている。又、コピーを鵜沼郷土資料展示室で閲覧出来る。(和)
- 日頃、生活している町の中で、何かの発見を心掛けていると結構面白いものや不思議なものに出会うことがある。そんな事柄を「チョット見てみよう」シリーズとして紹介していくつもりです。皆さんからの情報歓迎です。(裕)
- 江守邸解体と知って、江守奈比古氏とはどんな人物かを調べたら、実に教養の高い文化人で鵜沼に自邸「花外亭」を構えひっそりと茶を嗜んでおられた。このような「知られざる鵜沼文化人」を発掘、紹介するのも会の役目と思う。
- 「目印」の松は正確には松浦^{まつら}氏の敷地に生えているものではない。この土地はもともと周辺の別荘開発を行った山本家のものであったが、現在は所有権を特定し難い。今、綺麗な枝ぶりに見える松は松浦章氏が私費20万円を投じ剪定したものという。氏は長崎県平戸市にある松浦史料博物館理事長、大名茶道石州流の流れを汲む鎮信流家元でもある。(久)
- 20代の頃は人と人との不思議なつながりが数多くあった。その後、半世紀余り不思議といえるものは殆どなかったが、今回の塚本茂画伯に絡む出来事は不思議といえば不思議。記憶が薄れないうちにその経緯を書き留めておこうと思った。(弥)
- 源希義の墓がある介良で昭和47年8月に少年10人が空飛ぶ円盤を拾ったという「介良小型UFO捕獲事件」。興味を持った遠藤周作は少年たちに会いに行った話をエッセイに書いているが内田会員の墓参はそれ以前か以後か。
- 今井達夫プロジェクトは未発表原稿の活字化を終わり、残余の遺品資料を各々しかるべきところに寄贈し最終整理を終えた。

『鵜沼』 第 120 号
令和 2 (2020) 年 12 月 1 日発行

本誌の記事引用の際は
ご連絡ください

編集・発行 鵜沼を語る会
藤沢市鵜沼海岸 2-10-34
鵜沼公民館内
電話 0466-33-2002

URL <http://kugenuma.sakura.ne.jp/>